



アラン  
わが思索のあと  
(上)

高村昌憲 訳

## 一 少年時代

---

生徒でも弟子でもないと言える人で偏見のない公平と思える人物が、私の思想の経歴に興味を持って、詳細に書くように勧めました。この言葉が稲妻のように私の体の中を巡ったのは、一九三五年の今年の夏です。私は打ち明け話が好きでなく、小説の形であっても私生活のことを書くことはそれまで出来ませんでした。恐らく、そのことを考えるのは余り好きでなく、そうしないで私は自分を慰めていました。私は、忘れては再び始める術を心得ていました。ところがこの実際的方法は、箴言的になるしかありませんでしたから、物語にはなりません。自分を語らないのがその時の一種の規則であり、殆ど冷酷なことで、それは忘却へ導かなければなりません。

『大戦の思い出』を書いた時、私はこの規則に従いませんでした。だがその上更に、紙に書かれて三年以上になりますが、私はそれらを保存していて、再読しようと思っていますが、再読することを恐れもします。この投げやりな態度は恐らく、私が火に投げ入れるのも思い止まらせています。それらが何時か日の目を見たとしても、既にきちんと話すべき告白は見当たらないでしょう。というのも、それらは全く大胆に書かれていますが、なお至る処が慎重であるからです。私は一度も告白することがなかったので、私の思い出は当然何時も手を加えて整えられているかの如く思われています。

しかし、私の思想は反対に公言しております。非難されるとするなら一種の怠慢以外にありません。役立ったことは多くあったと思います。行動から思索を分離するための巧妙な方法は多くあると言われていました。でもその様な分離は、私には少しもなかったと直ぐにでも言いたいのです。全く反対です。思索は何時も私に与えていて、今でもある絶望、検討すべき非常に急を要する問題、又は他の言葉で言うなら、愚かさを乗り越えるために絶えず私を綺麗に洗ってくれました。その他のことは危険を伴う決心、そして完全に軽蔑すべき考えによって、成るように成りました。それらがもしも秩序を維持したり、多くの正確な真実と釣り合うために真っ先に何時も気を遣うものでなかったなら、私は遙かに遠くへ身を置いたことでしょう。しかしこの思索という宝物は、何を目指して私に何故預けられたのか私は知りませんし、それを知ろうとも思いません。この考えは、私が解けない疑問には関心を持たなかった優雅さを持っていたと予感させますが、更にその上で私はその理由をとうとう最後に知ることになりました。私は、人生を導くことについての思索による行動に関して、言いたいことに戻ります。一つの例しか挙げません。それは大変に簡潔ですが、多分良くあることではありません。高等師範学校にいた時でしたが、数人の仲間たちと一緒に私は酒を飲むことを覚えました。ある晩、私は良い気持ちになってふらふらに彷徨って、崇高な文章を何頁か書けるように感じたのを思い出します。ペンは飛んでるように書けました。しかし朝になると、それは何でもない文章で、寧ろ私が何時も犯して仕舞う愚かさの見事な事例でした。というのも私の生活において、何か外観を美しくするという愚かさを、心の中で制する必要がなかった日はないからです。ところがこの様な場合、私は自分で自分に感心して陶醉していました。その時私は、自分が怖くなってアルコールを止めて仕舞ったことを敢

えて言います。その後三十年程の間、会合の席ではコーヒーとミルクしか飲みませんでした。例外がなかったとは言いません。というのも何時も私のために、愚かなことでも飲まなければならないグラスがありましたし、そのことは一度も飲まない訳にはいかないことだったのです。ですから私は偶然に酩酊したのも認めますが、最早その様なことは信用しませんでしたし、望むことも求めることもありませんでしたし、高貴であろうと考えたのです。さて前置きはこれで十分です。というのもこんな調子で私は自分のことを語って喜んでいると思われているからですが、この喜びは酩酊のようなものが全てである限り、私にとっては軽蔑すべきことです。私はここで酩酊でないことなら何時間でも語りたと思いますし、最終的な私の生き方なら喜んでお答えします。

少年時代のことを言うのは少しにします。何故なら愚かでしかなかったからです。私が模倣し、暗誦し、演じ、読み、終わりのない話を自分で語っていたのは、基本的には二つの児童書を真似ていたのです。一つは『騎士バイヤールの物語』であり、もう一つは地下道の物語である全十二巻のもので、表題は『ヴィクトル又は森の子供』でした。今日でも私が何時も平然として無敵の英雄である冒険物語を自分に語るなら、何時間でも出来ると思います。自己から自己への物語である私のこの全生涯は、戦いに次ぐ戦いでした。何時も敵を絶滅させることが重要でしたし、私は遠慮しませんでした。『宝島』を読む前から私は、想像上の島を良く思い描いていたのを今でも覚えています。この点からすると私は、何の進歩もしていませんでした。これらの物語は全てが途轍もない愚かさを表しているのは同じです。ここには戦争と名誉と力を愛する人間の一面があります。他の人々にもそれと似たものがあるのを私は良く知っていました。恐らくそれは人々が思想と呼んでいるものに、不実にも混じり合っています。私としてはこの種の栄光は大変な侮辱と思っていますし、それは休戦後にメッツに入城するフランスの将軍に大変良く似ているようなものです。ところで私は将軍になる夢をみました。勝利し、支配し、強制し、脅えさせる夢を見ました。私は今でもその様な夢に、一種の寛大さを持っています。しかしながら、私はそんなことを少しも信じていません。この状況を十分に説明したいと思います。私は一度ならず意味ありげな夢を見ました。つまり睡眠中に、私はアカデミーから受賞されたとか受勲されたのです。私はそのことを注記します。何故なら夢の中では嬉しく感じたからです。ところで酔い心地の夢想は、平凡な成功以上に順調に行きました。私は決してそれを信じませんし、何時も中身の無い奇妙なものを感じていたと言いたいのです。例えばもし私がお金持ちであると夢想したなら、そのお金持ちには何の根拠も無く、私には奇妙に思われました。労働のことは考えませんでした。そのことを考えなかったことも同時に奇妙だったと私は思います。同様に、私は自分が暴君であると理解しましたが、どんな風になったのかは分かりませんでした。そして、直ぐにその方法を見付けようと良く考えましたが、自分が信じられるようなことは最悪のことばかりで、喜べるものではありませんでした。アレクサンダー大王もカエサルもナポレオンも、私がそうならないように何時も誓っていたのですが、動物のようになった時期があったと、私は納得させられています。私の野心に関する歴史全体は以上の様なものです。

従って少年時代は、全てが愚かであるように愚かです。私はそこに二つの変化しか注意して見

ません。一つは私を明晰にすることであり、もう一つは曖昧にすることですが、それらは思考を変化させるものになります。前者は幾何学です。モルターニュの学校で司祭から教わりましたが、彼は幾何学を理解していませんでした。私は、第四学級(1)生徒が使用する、小さな教科書を手を持つ彼を今でも想像します。この教科書を私は一度も読みませんでした。大学並みの教育を始めたがっていた彼は、黒板に図形を書いてから、その証明を大声で読んでいました。そしてユークリッドによる論理的証明が彼を少しも感動させていないのは明らかでした。この本につけ加えたことになる彼の仕事は、定規とコンパスで結論を確認することでした。そこで私は、少しも幾何学らしくない幾何学のようなものが生まれるのを見ました。それと同時に、他に本当の幾何学があるのではないかと疑いました。私はそれを疑い、そこで何か新しく美しいものを稲妻のように見ました。それは翌年にリセのアランソン校の第四学級へもう一度やり直した時に、完全に確認されました。

もう一つの変化は、全く根本的なことでもありました。十二歳になるまで私はカトリックの公教要理を学び、私の罪を懺悔して信仰というもので聖体を拝受して、お祈りを唱えていました。私はそれを覚えております。というのも地獄とか悪魔が大変に怖かったからです。勿論、私はミサに応じてロザリオの祈りを唱え、その点に関しては更にその上で素直で評判が良く、生粋のペルシュ人そのものであった友人のガスランに劣ることはなかったとも言わなければなりません。そして彼は今もその儘です。私たち二人は、町に危篤の病人がいれば何十回もお祈りを唱えることが任された組を最初に作りました。時々、校長の家の庭へ行かされて、ロザリオの祈りと祈りの間にスグリの実を食べるのが許されたことを私は思い出します。ここでも欺瞞は少しもありません。反対に二人の新人の美德は純粋でした。ところがその後二、三年経って、私は最早この率直な宗教心が心の中から無くなって仕舞いました。何故その様な変化が起こったのか、私は言うことが出来ません。恐らく、筋肉が強くなったので、恐怖が支配するのを止めたのです。私の少年時代というものは臆病でした。恐ろしいものを想像していました。単に悪魔ばかりでなく、あらゆる種類の泥棒もありました。私は泥棒の話を大変真剣に聞きました。人気もなく樹木で覆われたこの地方には、屢々泥棒がいたのです。ところが、あらゆる恐怖が全部消え失せたのです。あるいはもっと正確に言うなら、私の行動を支配していたものが全て一緒に消えたのです。私は、宗教は恐怖でしかないとは敢えて言いません。兎に角、宗教が私から去って行ったのは、恐怖が去って行ったのと同時であったことは事実です。

私はこの一節を書くについて、沢山考えました。つまり当時は殆ど気付いていないことでした。その点について一言で言うなら、私は最初の動揺が殆ど変わらないことに納得しましたが、それらの動揺が男の勇気ある働きで抑えると、それらは治まり、忘れるようになります。一つの働きが他の働きを抑えるのです。行動を起こす前は怖い、と英雄たちは良く言いますが、少しも重要なことではありません。妄想を前にする時は直ちに行動することです。つまり望んだことを実行すること、見に行くこと等々です。この恐怖は、極めて短時間で減少させなければなりません。そこから疑い深さによる活動そのもののようなものである勇気が、直ちに神々や悪魔から逃れさせてくれる結果になります。その上、私は実力を付けたのと同時に、リセの友人たちの見本になるの

は別にしても、人間による指導の元に移りました。そして彼らの間で、私は信者を引き合いに出すことは出来ません。私のガスランは、そのことを如何に考えるのでしょうか。そのことを知る機会は私には訪れませんでした。しかし彼が農民として、決して疑問を持たなかったことを私は知っています。今でも恐らく彼は、王党派としての信仰者です。ところでその後、もし私も良く望めば、信仰者で王党派になり得る何かを持つことを人々は知ることでしょう。私も良く望めば、という言葉は異端者として焼き殺されるものなのです。更に簡単に言うなら、その様な人々が宗教は信じ難いものであり、そこに這入るためには天からの救いがなければならないと言う時、何時も私をびっくりさせます。パスカルも同じで、私をびっくりさせます。私は寧ろ反対に感じています。私が知り合ったあらゆる人々の中で、私はその点では恐らく最も非宗教的であると自分で信じています。結局のところ、皆が仮面を脱ぎ、役を演じるのを止め、月並みな思想から離れて独りになれば、私以上に宗教的でなくなることを私は確信しています。彼らが演じているこの喜劇は政治的です。

如何なる観念もなかったように思うこの経験に戻りながら、私はそれでもその感情が実際の活動でしかないのを知るために、重要な観念を強固にして成長したと私は信じています。何故なら、最初の恐怖を軽蔑することと、デカルト流に肉体と精神を見分けることは同じであるからです。そして、それは勇気という活動によるのです。もしも機会があったなら、感情の中には決して思考がないこと、感情は何も言わないし何も証明しないことを、その後で自分で理解する準備をするのです。以上が私の考えによる証明のための本当の検討です。又、一度ならず何度もそれを私が注意するように、証明を要求しなければならないのは幻想ではないということです。というのもその場合、反論出来ない幻想は決して見ないことでしか誰も確信出来ないからです。しかし寧ろあらゆる思想は、何ものでもない幻想によって始まることも知るべきです。それ故に、それらの幻想は全て最初に送り返され、そして人間の肉体に蓄積されて、そこに本当の場所を見出すのです。それらは最早、そこから戻って来ません。

その後、私は如何なることについても、判断が自由である限りでしか熟考しなかったことを人々は理解します。この時期から行為において迅速で生き生きとして自由に行動するのが、私にはお気に入りになりました。これと同じ行動が、他の多くの人々にもあるのに私は気付きました。そして強制とか、少なくとも討議の末の見通しは、何時か突発的な反論に目覚めることしかありませんでした。それは状況を変えながら、無用にすると同時に人が行おうとした熟考の全てを圏外へ追いやるのです。怒りに先立つ一種の暴力であるこの性格の特色は、今日でもなお人が私を恐れるかもしれない唯一のものであります。私の自由を妨げたい人に、私は大胆にその自由を証明します。この種の決心の内容は、決して全て似ていないのですけれども、屢々極端な悪意を意味しています。ところで、これらの取り消しの出来ない突然な方針の変更を熟考して以後、それらが私の思想の方向付けにおいて、特に役立つことを私は理解しました。私が捨てたいものはもう思考しないという方法も、これらの肉体の急激な変化から生じています。人々は少しも信じようとしないのですけれども、その結果には驚かされます。そして或ることを最早考えないと決心した時から私は、邪魔者を永久に排除する命令を与えた暴君に似ています。この単純化の精神は、

思考においては卓越しています。かくして私は屢々、自分で決めた最初の決心に身を委ねて、最早戻らないで書くことは、その態度における決断をも表していました。私は不決断から解放されて自由でした。書く行為においては今でも私は、熟考するに不確実なことを屢々選んでいます。私にとっては仕方がないのです。この選択に満足しなければなりません。何故なら、私は後戻りするのが大嫌いであるからです。書いたものを修正したり削除することはありません。そうして私が注意していることは、決意することと行うことに決して相違がないということです。大分後になって、修正しないで良い形式に基づいて書くことを、既に学識の深い少年たちに勧めていた時に私は次のように言うのでした。「特に考えてはいけません。書いて下さい。書き始めて下さい」。この方法は、奴隷であることを全て終わらせます。不都合なのは屢々失敗することです。しかし、私が何時も定めている規則は、修正するのではなくて、寧ろ全て最初から書き直すことです。ところが大変に乱暴なこの種の方法は、私が実用的問題に応用すると、第一印象は何か冷酷な感じがしました。決して戻らないというのは、厳しいことです。昔に戻ることを止めるのを学ばないのは、屢々私にも余りに困ったことでした。デカルトが言うように、それは後悔から自由になることです。従って私は、デカルトを私に相応しい先生と認めたのです。デカルトをそんなに好きな訳でもありません。しかし、ここでは好きとか好きでないとかが重要ではありませんでした。最初の思考から逃れて、迅速に選択しなければなりませんでした。人は選択しながら、見捨てたものを全て取り戻していることを、その後私は知りました。私を知る限り、ここに実際の哲学の姿が現れます。そして私が信じるのを止めた時、その年齢で私は哲学にも他の如何なる知識にも関心がありませんでした。私は、強制されてラテン語、ギリシア語、フランス語を学びましたが、退屈することもありませんでした。私の注意は、バカンスの楽しみに全てがありました。例えば大人の労働に参加すること、畑の収穫で私の分を行うこと、馬の調教を手伝うこと、狩猟の勢子(せこ)や獲物袋運搬人をやること、鯉やザリガニを釣ることです。

そのことで私は、注目に値する二つの例外を良く見てみます。最初は、幾何学に関することです。それはリセで、細心綿密な人間によって説明されました。彼は経験を超えて証明を把握するのを覚えた人物でした。彼の何時ものやり方は、描いた図形を前にして、ゆっくりと独り言を言うことでした。私たちにとって重要なことは、彼の極めて慎重な話の内容を記憶に留めることでした。そして一言も変えることを彼は許しませんでした。私としては理解することとは、直ちに行うことでした。しかし言葉遣いが初めて私の注意を占領していました。以上は何となれば、従って、それ故に、という連結語の意味にも私は注意しました。曖昧でなく、そして出来るだけ最少の言葉で言う技術に興味を持ちました。私は、最少の文字で言われたことを好むまでになってきました。私には自分を訓練する機会があったのです。何故なら、三か月毎の学期末の作文試験で、私たちは授業中の問題と呼ばれていたものの後に、純粹幾何学の難問が課せられたからです。そして私は、どんな問題でも一回で十点を取って一番でしたので、私が何時も同じように十点が取れるかが、私や皆にとっての一種の賭けでした。教師は私の答案を勢いよく掴み、問題に目をやり、そして微笑しました。ところで、その十点（それは最高点で、それまでは一度も貰ったことがなかったのです）は、問題の解答が上品に展開されていることを前提とされていま

した。つまり正確で、構成のルールに従っていることでした。私はそのことが良く分かっていました。私は自分の賭けに勝ちたかったのです。そして五年間、私は勝ち続けました。そこからは勉強するという観念を私に与えてくれました。というのも、その他のことは遊びでしかなかったからです。しかしながら、これらの輝かしい結果は、大きな勘違いの機会を与えることとなりました。優れた人物であるその教師は、私を既に理工科学校の生徒になると見ていました。先ず、私に文科と科学の二つのバカロレア（大学入学資格試験）を同時に受験させる計画を立てました。彼は私にこの助言を決して見逃しませんでした。しかし私は最後まで、一冊の本も開いて勉強しなかったこと、そして当然に正しく知らねばならなかった良く使う曲線を深く知らなかったことを、良く理解して置いて下さい。最早それは私の賭けではなくなっていました。要するに、恥ずかしいことに私は科学のバカロレアに不合格になりました。私の仲間たちが言っていたように、愚かにも不合格になったのです。それは私にとっては、些細な悲嘆でしかありませんでした。ところが私にとってショックだったのは、教師たちとその次に両親が、極めて不当に私が不合格にさせられたと思い込んだ儘でいたのを知ったことでした。私は抵抗しましたが、少なくとも私が言うことを聞いてくれませんでした。当時、私はそのことを反省させられましたし、今でも反省させられています。皆が私の頭の上に置いていたこの厚い信頼に、私は十分に応えなかったのです。私の仲間たちは、全学科で私に一番になる義務を与えていたのを私は十分気付いていました。この気持ちは、人間としての思い上がった考えを私に与えていたのです。というのも彼らは結局、子供に過ぎなかったからです。ところで彼らは、私が侮辱されていると分かると、彼らも侮辱されたのです。そして彼らは、そのことで私に非難することを良く覚えました。一番びっくりしたのは、歴史の教師の行為です。彼は何時も私が多くの知識がないとしても文才で書けるようなやり方で、作文の問題を出していました。彼はそのことを自分でも隠そうともしませんでした。そして仲間たちもそれで良いと感じていました。全員一致の意見によって、より高い運命へ赴いていた私は、全くの恩知らずでした。私は全時間を、ディケンズの小説とユゴーの『観想詩集』と音楽に費やしていたのです。

音楽は、幾何学と同時に私に啓示してくれました（おゝ、プラトンよ）。それは最も出来の悪い平凡な音楽でした。リセには、音楽の演奏を知っているが、細かい点まではこだわらない人物が指導する楽団がありました。私はコルネット(2)やトロンボーンやコントラバスのような易しい楽器を習いました。私には新規のものであった幾つかのパート譜、和音、不協和音に飛び込みました。最後には副指揮者になり、その資格で殆ど全てをやりました。私たちは裕福ではありませんでしたので、指揮者の譜面（ピアノ編曲）だけを購入して、私自身で各パートの演奏を斟酌しながら割り当てることを考えました。間違いながらも私は学びました。指揮者は最後に私を職人に扱いました。リセの学監が亡くなり、指揮者は弔意を表して（彼はカフェの経営者でした）、翌日に演奏する葬送行進曲を、質の悪い紙になぐり書きしました。私はその紙を受け取り、解読し、楽譜を見抜いて書きました。指揮者は練習を仕上げに来ました。その曲は短調の悲しいものでしたが、すっかり葬式の時に聴かせる楽団のようになっていました。その曲の価値は何もありませんでした。私たちが演奏していたポルカやワルツや速歩行進曲と同じでした。しかし結局

のところ和声は全ての音楽にとって同じものです。そこから私は音楽を知るようになりました。その時から私は、出来の良くない音楽にも大変な興味を持ち、人から望まれる限り書く能力を身に付けました。しかしその点では町の楽団のために、明日にも行進曲や舞踊曲を作曲すれば生活費を得ることが出来るのも確かでした。当時の私は、モーツァルトもベートーヴェンも聴きませんでした。その養成方法には良いことも悪いこともありました。私の初めの期間は、芸術を語ることよりも、お分かりのように別のやり方で芸術に興味を持つ好機があったのです。

私が理工科学校へ入学する道は短いものでした。私は、パリのリセであるヴァンヴ校（後のミシュレ校）へ奨学生としての転校を勧められ、実際に転校しました。七月の入学試験が不合格になったので、十月にやり直さなければならず、数学の特別授業を受けなければなりません。私の父の古い友人で、昔から私がやることを見ていた人物が次のように突然私に言った時は、私が熱心さもなくこの道に這入って行くところでした。「それじゃ理工科学校へ受験するのは止めなさい。高等師範学校文科なら、そんなに勉強しなくてもあなたなら合格するよ」。それは私の気に入りました。ヴァンヴ校の人々も何も言いませんでした。そしてこの様にして私は、今まで一度も考えたことがなかった道に投げ込まれたのです。

- (1) 第四学級は、中学校二年程度の学年である。
- (2) コルネットは、小型のトランペットである。

## 二 青春時代

私的な思い出には触れないで置く、と私は言いました。家庭生活のことは何も言わないつもりです。そのことに関しては、多く考えたことがなかったと思います。私が不幸な子供であったことは、大変容易に証明されることだと思います。しかし、それは本当でないかもしれません。私に思考するのを与えたことしか留意したくありません。父は、二輪馬車で私を連れて行く、一種ディオゲネス(1)風な人でした。私は忽ち手綱を握るようになり、だんだんと力をつけて来て獣医の仕事を手伝うのですが、父は名医でしたし、皆も認めていました。私は手によって多くのことを学びました。以下は、私の精神を開けてくれた注目すべき一例です。ある日父は、五百メートルも離れて早足で行く一頭の馬を指しながら言いました。「あの馬は片目なのが分かるかい」。「片目って、何故分かるの?」。と私は答えて言いました。「動物を良く知るようにならなくてはいけないよ。片方の耳を見てご覧。回しながら探っているでしょ。そっちの方が見えなくて片目なんだよ」と父は言いました。又、別の機会には自分自身に話すようにして、アメリカ人たちが沢山の馬を購入したが、何故彼らの国でペルシュ産の馬が定着しなかったのかを説明しました。父は言いました、「彼らには、このように乾燥した牧場がないのだよ。直ぐに湿る牧場では、ペルシュ産の馬は脚の病気になって仕舞うのだ。水疵(すいひ)病だ。馬は爪先で歩くようになる。そうなると馬の尻が崩れて仕舞う。二、三年後には駄馬にしかならないのだよ」。私は、動物の形が丘の形のようなものであるのを垣間見ました。そして、その日から私は、ダーウィン主義者として絶えず思考しました。父は少ししか話をしませんでした。屢々成る程と思う警句を言いました。私が高等教員資格を取得した時にも父は言いました、「多分、お前はそれでも愚か者でしかないよ」。この教訓は私には必要がありませんでした。しかし、この教訓は誰にでも何時も必要になると言おう。私に天文学の趣味を与えてくれたのも、やはり父だったのだろうか。父はどんな本でも読んでいました。この世に滅多にいない信心深い人間ではなかったけれども、聖人伝も読んでいました。父の天文学は好奇心を出ていなかったと思いますが、「地球に一番近い星」として大犬座のシリウスを鞭で示して教えてくれました。その時だったか、その後だったか、どうしてそんなことが分かるのか私は自問しました。いずれにせよ、天文学が好きになったのは幾何学のせいでもありました。今でも私は、光年や螺旋星雲のことなどはどうでも良いと思っています。ですが家族のことは止めます。というのも、私はそのことについて何時も読者にとっては面白くない恭しい嘘をつきたくなくて仕舞うからです。

或る人物についてはもう少し詳しく述べます。私は彼を尊敬していないに違いなかったし、彼も私に敬意を求めませんでした。父は彼に興味を持っていました。彼は弁護士で、私の父よりも少し若く、独身で、大変にブルジョア的な生活を送っていました。君主制擁護者で正統王党派でさえありましたが、ペルシュの町の人々はそれが一般的でした。彼は、私が共和主義者であるのが良く分かるが、それは結局何もならないで、宮廷人の言う言葉を色々と言っては屢々私を馬鹿にしていました。彼は宮廷人になりたがったのです。しかし彼は沢山の良い本を読んでいました。彼は愛情と名誉を信じていました。今日までも続いているのですが、私の驚きの一つは、

私はその点について困惑していることを言った時、彼が嘘について或る日言うのを聞いたことでした。というのも私たちは何でも話していたからです。彼は私に言いました。そして大変に勿体振って繰り返して言いました、「どんな時にも決して嘘をついてはいけないし、例外を作る人は詭弁家である」。でも彼自身がその日、十回も嘘をついているのを私は聞いたかもしれないのです。彼以上に秘密を厳守出来る人間は、誰もおりませんでした。その上、彼の顔は美しく、自然に引き締まっていて、入り込めないものでした。私は時々、彼なら政治家になれたらと思うました。それに彼は、プーランジェ事件の陰謀者の一人でした。しかし嘘について、原理を考えることとは何なのでしょう。原理から適用へ如何に移すのでしょうか。この人物は私に対して、少しも偽善者でなかったことが私には分かりました。尤も彼からは、どんな釈明も私は聞きませんでした。私が少なくともこの大問題について守ることが出来た何かを表現するまでには、沢山の頁を書きました。ここで私はその人物に一直線で当たって行きましたが、私は堅固で不透明なものを感じました。そしてそれ以上に、そこに実質的なものを感じましたが、大変に尊敬すべきもので、少なくとも首尾一貫していないのですが、大変に合理的なものでした。それは何処から来たのでしょうか。恐らくそれは、彼自身に対しては少しも首尾一貫していないと私には見えましたけれども、私は完全に彼には信頼が置けたからです。そして、そのことに関して私は正しかったと今では納得させられます。彼は私に嘘をつきませんでした。偽善や如何なることにも嘘をつきませんでした。偽善や如何なることにも嘘をつきませんでした。

私は今、何ものかを作った壁の一つに手で触れています。私は何時も解決を軽視していましたが、ついにその理由が分かりました。兎に角、異議や解決の問題が私を空腹にしたのは胃実です。私は、全てが本当らしくて不安定なものの結合と対峙していました。それは何時も私に、最も大きな疑念を抱かせました。私は反論と殆ど同じ位に、議論が嫌いでした。私が良く経験した或る種の難解さしか気に入りませんでした。私が良く経験した或る種の難解さしか気に入りませんし、それは空虚でも虚ろでもなく、反対に中身が濃く、そして私はそこに執着しに来て、更に執着して、それを見抜くのが少しも待ちきれないのですが、反対に穏やかにして決めて見抜けないことも確信していました。私は時々、私とは別のイメージを与えていました。何故なら、何時も即興的に行う韜晦趣味の人間であって、屢々輝き、疑問を持ち、嫉まれ、私がかたじかにした人々によって非常に手厳しく批判されていたからです。私としてはそんなことはどうでも良い思っていましたし、その次に起こることも気にしていませんでした。というのも私に浴びせた意見は、何も生まないからです。そして彼らは私を軽薄だとか、最悪だとか批判していましたが、私は彼らの意見を変えようとする手段は決して取らず、指一本動かさませんでした。私は今でも同じです。その頃から一種の政治的で文学的な食事の席に着いていました（それは習慣にしておりません）。私は隣の席の人あらゆる術策を目論んで話しました。その人は大変に有名な大物でしたが、それは眩惑するためではなく、私が楽しむためでした。後で彼が何を考えるか、私は少しも気にしませんでした。私が政治活動に入った時、強硬派の人々からどれ程疑われ、密告され、軽蔑されたか明らかですが、私は気にしませんでした。そして私は正しかったのです。というのも彼らは、私を最も意志が強く、裏切ることが最も少ない人間の一人として見

倣すまでに、何時も彼らは考えを変えたからです。

私の話相手だった友人は、殆ど人気のない地方へ狩りに何回も私を連れて行ってくれましたが、そこはウール川の源流になっていて、森と池だらけでした。私自身は早々に狩りを止めて仕舞い、孤独の中で散歩しました。そこでキャンバスに何枚も絵を塗りたいと思いました。雄鹿や猪にも出会いました。その夜は主人と会話をしましたが、彼は何かと批評したがる人で、経験もありました。バルザックやゴンクール兄弟を私に読ませてくれたのも彼です。スタンダールのことは、彼は何も知りませんでした（一八八五年頃でした）。彼の家で『アンナ・カレーニナ』を見付けましたが、彼は良く知らないように見えました。バルザックは何時ものように、物語も考察も汲み尽くせないテキストでした。彼は殆ど議論しませんでしたし、寧ろ注意して聞いていました。追随者のこの彼が、明らかに全く自由な精神の人であったことに私は感心しました。彼は、全く私に欠けていた世界中の流儀を私に与えることに一生懸命であったので、大作家たちに正しさを与える流儀を、私は最初に考慮しました。私を判断して口を出した人々を、最初はこれ以上びっくりさせたいことはありません。その後では、これ以上感情を害したことはありませんでした。私は職業柄、厭らしい連中である反論者たちの中で生活していました。

いや、先走りしました。大変に高尚であると同時に、大変に礼儀正しかったこの人物と一緒にいて、そこで考えもしないで多くの流儀を模倣しました。私が拒否することを決して正しいとしない習慣を身に付けたのも彼からです。それ以来私が理解したのは、正しいと認めながら拒否することは、決して拒否ではないということです。肩幅の広いこの影の人物と、私は厭々ながら私の道に置き忘れましたが、もしも神々が正しいのであったなら、彼は銃や犬と共にシャンゼリゼ通りの木陰を彷徨っているに違いありません。

(1) デイオゲネス（前四一三から前三二三）は、古代ギリシアの犬儒(キニク)学派の代表的な哲学者。名誉も富も社会的礼儀作法も無視して貧しく、住居は〈樽〉であったために「樽の中の哲人」として有名である。

パリのミシュレ校にいた時、私はジュール・ラニヨーの授業を受けていました。私は思索家を知り、彼に感嘆し、真似をすることに決めました。当時からその後、私は先生の良き味方でした。しかし、先生が望んだように私はそれを続けたのでしょうか。そうでないのは確かです。私は、対象にくっついて行う一種の分析を彼から学びましたが、それは思考することでもありました。見ること、触ること、聴くことについての彼の探究は、私に一つの世界を開きました。事物の世界も、思考の事実と同じであることを知りました。例えば、空間の要素である距離を質問する時、それは思考以外の何ものでもなかったことを私は理解しました。というのも距離は存在しませんし、事物から私まで、事物から事物までの関係でしかないからです。従って私は、事物の服のように見えるこの輝かしい空間を変えて、作り、見渡し、線を引き、深く掘り下げることを知りましたが、それは判断によって存在するだけです。その度に、仮定し、見積もられ、維持されます。その度に、不注意によって消えます。私が拒みたくても拒めなかったこの観念は、毎日午前中に着席している時であっても、永遠に私を変えましたが、先生を見るのが困難であり驚嘆でもあった状態の時には、新しい席に着きもしました。そうです、毎日午前中は如何なる人間も世界を再構築するのです。その様なものが目覚めであり意識です。そして毎日午前中にその哲学者は、二重の目覚めで同一になった目覚めに感嘆し、魂の中の魂を取り戻します。私はそこで殆ど身動きしませんでした。何故ならこの発見は、私には出来るものでありませんでしたし、私を強くしたり慣らすことも出来ませんし、それを信じることも出来なかったからです。発見とは、人はそれを行うことしか出来ないし、繰り返して行うことしか出来ないのです。「思考は計量することである」。ラニヨーのこの方式は（私は他の多くのものの間で思い出します）、ありふれた観念論から私を守ってくれました。というのも計量は世界を作る布地のようなものであるからです。そうしてその世界が私に依存するのを止めるのも、まさしく計量によるのです。思考はそれ故に、私の外へ私を放り投げます。思考は私の人間としての地位に関する計量関係を把握する限りにおいてのみ自己であり、主観的ですが、そのことは世界における対象を再び認めることなのです。そして情熱さえも、事物と状況の真実が関係していることによってしか秩序を乱すことになりません。その時は幻想と間違いが裁かれます。私は、もしも〈神〉の中で、何らかの方法によって思考しなかったなら、全く思考しなかっただろうと時々考えるようになりました。それはスピノザ主義者になることです。そして、ラニヨーは私が思っていた以上にスピノザ主義者であったことをその後知りました。その頃の私は、殆ど何も理解することなく『エチカ』を写し始めました。私を第三の天（1）のようなものに連れ去ったものは、輝く真実の世界から私自身の夢の中で見出すことでした。その世界に加えて、そしてその世界そのものによって存在そのものを見出すことでした。従って、私が殆ど信じていなかった懷疑論という病気から、私は永遠に治ったのです。真実が私から遠ざかって私から離れていると言うのはとんでもなく、反対に私は真実に基づく真実を手に入れた感情を持っています。そして或る意味では、人が知り得る全てを手に入れたという感情を持っています。しかし、それに基づいて私は全ての真実が生み出す

という体系を期待しておりません。その体系が如何に生み出されるかを知りたいとも思いません。反対に真実の体系においては、全ての真実が消えてなくなると私は確信しております。それは真実以外の部分を持ちながら支えている世界であり、決して思考ではありません。そして、或る意味でその様なものが存在し得る観念を、私は少しも信じませんでした。反対に、観念はそれらを創る弁証法的な働きによってしか存在しないのです。人は観念を残した場所に、その観念を発見する確信は決してありません。反対に再発見しなければなりません。それらを再発見するための本当の順序があるとも私は考えません。幾つもの順序が相交わっていて、数学がその例を見せています。しかし数学も又、その観念を守っていますし、失いもします。しかしその代わりに数学は、その観念を守ることは出来ません。何故なら、その観念は自ら守らないことが分かっているからです。ラニヨーが、この賭けのルールを完全に受入れていたかどうか私は知りません。けれども受入れていたことを私は信じています。ラニヨーは言いました、「絶対的真理は決して無い。それは私たちが毎日確保しているパンのようなものである」。しかし、彼も人間でした。時々是不安定でない理念、実体のある理念を望んでいるように私には見えます。私が気付いたことは、出来が悪くなかった多くの弟子たちがこの探究の真実、存続する真実、何か計算出来る真実を知りたいと思っていたことです。レオン・ルテリエはその様な人々の一人でした。認識に関しての激しい欲望から彼は、神の存在についての有名な教訓をラニヨーから引き出すのに成功して、その後再構成して出版されました。その頃は、私も生徒ではありませんでした。私ならこの冒瀆的な企てには反対しただろうと思います。どのようにしてでしょうか。多分、思考を恐れない聴講生を見せることによってです。いずれにしても、最後にラニヨーが言っていた言葉は、神は存在すると言われてもこの世にすることが出来ない、でした。私もそれは確かにそうであると思います。しかしこの結論は惨劇を生んで繰り返すかも知れない、と私は正直に言います。恐らくこの人物は考えられるあらゆる秩序を、繰り返し壊すことを何度も憎んでいたのです。私は、如何にして難関を切り抜けたのかを説明しようと思います。読者は既に見抜かれていることと思いますが、意見に対する無関心や大変に自己満足している秩序を少しでも揺さぶる趣味そのものが、思索家としての仕事に私を就かせても、それらは先生程に困難ではなかったのです。その中で先生は死にましたが、その代わりに私は幸福に生きることが出来ました。でも、私は何時も攻撃の矢に晒されていましてし、何時も運に任せて危険が伴っていたと正直に言います。何故なら各々の運動が抵抗と関係していましたから、私が教えたことには確信があったのと同程度に、思考が思考そのものに従って人間の秩序を創り直すという推測の中で、私はその結果に確信がありませんでした。しかし、この推測は意味が無いとも思っています。秩序は断固として存在していますし、最も大胆な思考は、有名な言葉に倣えば、秩序に服従することによってしか秩序を変えることが出来ません。変革者の堅固で不安定なこの姿勢は（何度もやり直すことです）、私とその様なものと理解している急進的政治を明確にすると人は気付くでしょう。そして急進的政治とは、あるが儘のものであると私は言いたいのです。

あるが儘です。この独断論は、私が少なくとも確信していなかったとしても、大変に正しいと言う気になっている観念の愛好者を、酷く苛立たせることになるかと私は予感しています。私は少

しも人から好かれようとしません。そして、私は本質的に分割されたものへ真っ直ぐに行く方法を持っていますし、それは観念によって経験を決定するのを私に許すものである時に、著者から著者へ求める振りをして、あらゆる既知の意見を使い尽くす理由が私には分かりません。しかし、ここでの愚かな反論は雌鶏のように姿を消します。観念によって経験を決定するとは、何と愚かな方法でしょう。しかしながら畑の面積を計算する幾何学者は、決して非難されません。何故なら、幾何学は面積を変えないからです。反対に、幾何学は最も正確に面積を求めてくれますが、その代わりに情熱は鼻を利かせて面積を調子良く間違えます。同様に、私が観念によって政治的経験を決定すると言う時でも、そこから観念が経験を変えるとは理解しません。全く反対に、観念があるが儘に経験を表しているのです。この方法は要約するのを容易にしますが、理解したり実行したりするのは困難です。これらの頁は、全てが何らかの方法でそれを説明するのに貢献します。私が生徒たちに話をしていた時、それらの説明を全て公にすることは考えもしませんでした。それはあらゆる問題が混じり合い、混乱することなく行くことはないからです。生徒たちは、少なくとも何人かはそこから切り抜けました。最も教養ある読者は、そこに困難を幾つも見出すことでしょう。しかし恐らく読者は単純な好事家にとって、思考が最も期待外れの機能である経験を生んだか否かに固執するのでしょうか。取りかかるのを覚えなければなりません。思考する仕事は鍛冶屋の仕事のように覚えることである、とラニヨーは良く言っていました。彼が言おうとしたように、私はそのことを良く理解していたでしょうか。今の私は、その疑問が最早意味をなさない年齢です。私はあらゆる方法で事態を切り抜けています。何でもやっています。私がプラトンから発見するものが、何かを理解するために私が前進するならば、プラトンが良く思考したどうかは重要なのでしょうか。この思想は少しずつ私の中で強くなって行きました。私が好きになった著者たちをより良く理解するにつれて、次第に私は文字通りの正確さに余り拘束されなくなったように見えました。しかし、私が著者たちを如何に理解し考察したかは、この後で良くお分かりになるでしょう。

厳しい先生であったラニヨーの教えに基づいて、私は偉大な著者たちの考えを勉強し始めました。スピノザの『エチカ』は良く読んで分析し、あらゆる検討をしましたが、机上でやることで全て行ったかの如くです。私としては、今でも見る手帳に有名なスピノザの命題を写し取り、私流にそれらを注釈していました。この恐ろしい著者のために他の多くの人々に多分起こったことが、私にも起こりました。私は一行ずつ全ての行を理解しましたが、お互いに重ね合わされたこれらの明瞭な観念が、計り知れない難解さを形作っていました。何故、私はこんな厄介な勉強を何年もの間続けたのでしょうか。恐らく、不動で堅固な難解さを全て最小にして認めることを、私が話した安心感によって続けたのです。私があらゆる希望を失うようになったのは如何なる意味なのか、を説明します。要するに私は、最も困難な仕事を行っていたのです。ところがスピノザは、極めて迅速に何時も私を治してくれました。彼の中に私は人間の真髓と動物的なもの、ついにはスフィンクスのようなあらゆるものを見出せると思われました。そして、それが慰めの場所になって、そこから自由がはね返って来るのを私は説明します。何故なら間違いの中の間違いは、難解さから遠く離れて自由になるのを望むことであるからです。それは困難を嘆く結果に

なりますが、反対にその上で十分に進展して、何らかの方法で全てを信頼するや否や強くなるからです。二流の思索家たちは困難を遠くから見る人々であり、守りに入ります。それは戦う前に疲労しているのです。私は箴言集を惜しげもなく与えます。それは如何なる欺瞞もありません。私がどんな風にして思考する仕事から切り抜けられたのかを、実際に知りたがる未知の友人たちのために、私が今も書いているのと同じです。彼らが好きなようにこの独白へ私を導くのを容認していることを、私は知っています。

スピノザと同じ位に屢々現れたもう一人の若者は、プラトンでした。それも又、最も難解なプラトンでした。『ティマイオス』が私たちの前で読まれましたが、良く理解していませんでした。優雅に話しても少しも微笑しない一人の男によって、ギリシア語から直訳されました。私への効果は魔術的でした。軽快でにこやかなこの自由が、私には容易に分かりませんでした。それは突然に最も激しい注意力を手に入れて、そのものを私たちから直ちに逸脱させるのですが、まるで地球上の能力を考慮しているかの如くでした。それ以後、私は神聖と良く呼ばれていたこの著者を絶えず読みました。私を何時も導いてくれて、彼の言葉の遊びとか婦人たちの話を楽しみました。アテナイの將軍アルキビアデスとかグルコンのように、私は聞くことしか頭になく、彼から決して強制されたり圧力を受けたりすることがなく、彼からは遠く離れている人物でした。私が職業としての仕事の中で、恐らく何時も骨が折れたことは、何時も何らかの新しい私の部分を残して眠りから覚めていることで、彼の投げかける一瞥の矢から、厳しくて辛い困難の中にあっても、一瞬で私は次から次に物事を理解するのです。思想の商売人たちの行列で一部の人々が、せいぜい哀惜を私に示しながらも、道の途中で私を置き去りにして長い時が経ちます。私は、彼ら動物たち（スタンダードが好んで言っていたように）が気に入らなかったのは、高慢で性急で、そして反論を完全に軽視していたからです。しかしながら私は、人物には軽蔑の感情を持ちませんでした。そして私は、同胞や兄弟以外の人を見出しませんから、思想の商売人よりもより深く探究することが出来るのです。軽蔑を少しも感じていないのに、軽蔑を屢々示すことは不幸でしょうか。恐らく、まさしく不幸ではありません。

以上の様に私はパリ郊外のリセで、スピノザやプラトンの偉大な遊戯を演じ、それによって書くことを練習しながら更に純粋な修辞学のあらゆる訓練に従いましたが、歴史から離れたのは私が十分に取り上げなかったからです。日々外出してはパリを知りましたが、十分に知った訳ではありません。しかし、私はヴァンヴの丘の何処でも見た煙草を吸う人々が好きになり、そこで探検家のように蟻や蜜蜂と同様に、良く知らない多くの村々や住民たちを発見したのだと思いました。勿論ここでもう一度私は、思考する前に行動するのが幸福であったことを確かめなければなりません。何故なら私の寄宿生保証人は二人の薬剤師で（二人は兄弟でした）、一人はジャンヌ・ダルク通りのくず屋に住んでいて、もう一人はリシャール＝ルノワール通りの小さな職人の家に住んでいたからです。そして私は全く自然に両方の家に薬壇を少し運ぶようになっていました。その様な幸福の時によって住民を観察するどころか、私は住民になっていました。二人の薬剤師は田舎の人で、私のようにモルターニュで少年時代を過ごしましたが、文学的素養には全く疎くて関心もありませんでした。私は直ぐに彼らから離れて探究するようになり、そして完全

に二人を忘れました。私は、演劇や音楽に惹き付けられましたが、彼らには用がないものでした。

時間が経つうちに演劇を夢見ていた友人によって、音楽家グループと関係を持ちました。このことについては、私の思想の方向を決めたことだけは少なくとも示したいと思います。確かに二十歳の時に、初めてモーツァルトやベートーヴェンを知ったことは、小さなことではありませんでした。この誘惑は私をうっとりさせて、コンサートへ幾つも行きました。（ラムルーは私たちの英雄でしたし、〈第九交響曲〉はお気に入りでした。）私は演劇にうっとりすることはなかったのですが、観に行くことは行きました。お金がなかった時でさえも、何時も席が取れるようにフランス座の改札係や案内嬢たちと知り合いになりました。学生服が私には有利に働いたのです。少し後になると、舞台裏の人々とも知り合いになりました。手に帽子を持っていさえしなければ、音楽家とか衣装方のように気付かれないことも知りました。そこで私は、何を見たのでしょうか。それまでは私が考えたこともなかった大変な虚栄心です。そして非常に古くて力強く、物静かで滑稽なこの芸術についての手段の単純さが、少しは分かりました。それは本当のことです。多分珍しいことと思いますからここで私が書き留めたいと思うのは、私が役者になるとか演劇を書くという考えは一度も持たなかったということです。しかしながら仲間の気晴らしのために、私は一幕ものの詩劇を即興で書いたことは覚えています。その様な軽業を、恐ろしく簡単に行う能力も私は持っていました。今でも持っています。そして形式通りの詩を書くことは、私にとって何でもないのです。大変美しい詩を書くことも何でもないと言いましょ。そこからこの芸術は、私のものではないと知りました。私の芸術は寧ろ音楽でした。私が旋律と低音との関係を最初に知ったのは如何に惨めであったのかを人はご覧になりました。この知識は、より選択した経験によって身を清めました。そして、何時も先生がいないお陰で大いに鍵盤楽器に苦しめられましたが、そのお陰で、その後何年か経つ間に即興演奏も出来るようになりました。そのことは何人かの僅かな人々は知っていましたが、彼らは感動もしてくれました。そのことで私自身が考えたことは、音符も即興的に書けば忍耐がいることですが、時には頭に頼った音楽的創造にもその即興的なものを与えることが出来ただろうということです。鍵盤楽器の即興演奏が、私の本当の創造と如何なる関係もなかったことは注目すべきことです。楽器の即興演奏は旋律とリズムによって導かれるに違いない一段階であって、紙に直接書かれた音楽は他の音楽を干上がらせるに違いありません。楽器での即興演奏は、子供時代の安易な記憶を消すのと同じ方法であると私は推測しています。私はその点については決して探究しませんでした。しかし私は、音楽と同時に観念も生み出していたかもしれませんが、問題ではありません。その上、私が書いた僅かな作品も殆ど注目すべきものではありませんでした。専門家たちは私が音楽を知らないことを何時も非難していた、とジャン＝ジャック・ルソーを真似て私は言いません。ところで私は、本当の友人たちの前でなければ、音楽の知識を自慢することもありませんでした。（完）

（1）新約聖書「コリントの使徒への手紙（二）」第十二章第二節を参照

## 四 高等師範学校

私はそういうことで、高等師範学校へ近づきました。もしもその学校の状況を良く知っていたなら、最初の入試で合格したでしょう。しかし、多くの人々がそうであるように、私も何度か試みなければならないと思っていました。ラテン詩の音韻学と同様に歴史も覚えて、この私に不足していたものをもう少し、早く学ばなければならなかったようです。私はそれらの勉強を先送りして、手を付けませんでした。その代わりにフランス語小論文の書き方を、文学にしる哲学にしる素早く覚えました。私はヴォルテールを、端から端まで夢中で読みました。そのことは大変に美しい奥深い絵画を生んだのですから、私は感謝しています。モリエールもラシーヌもラ・フォンテーヌも自分のものにしました。文学者たちが哲学的逆説と呼んでいたものを、見事に構築していたことを私は思い出します。文学者たちはそれを愛しません、評価はしています。文学史家のブルユンティエールは或る年に機嫌を悪くしていました（何が起きるか、何時も少しは分かっていた）。でも、及第すべき点数のうちでは、一科目も不合格にしませんでした。大学教授たちにおいては、ご機嫌や確信でさえよりも、もっと強い公平さがあることを私は屢々気付いていました。それ故に、或る思想が確実に怒りを買うとは決して信じませんでした。それは受験に失敗した人々を慰める伝説であり、本当のことではないのです。私については、見知らぬ者でしたが、直ぐに好意を持って考えてくれたと確信していますし、あの文学史家でさえも私に対しては出来る限り親切であったと感心しています。しかし私は、何故この親切に不分別な行為で応えたいのか分かりません。例えば、次のユゴーの有名な作品（天よりの火）の一節を、ブルユンティエールの前で注釈した時です。

エジプトよ。それは広がった、真っ白な麦穂よ、等々。

私は、かなり下手に大声で読みました。そして全体を批評し始めましたが、教授はびっくりしていました。後で分かったことですが、聴衆は憤慨していたとのことでした。ブルユンティエールは私を助けたいと思いました。しかし私には殆ど役に立ちませんでした。もしも私がそれを単なる性格からの行いとしか理解しなかったなら、そのことは話さないでしょう。重要なのは、私にとって自然な精神の活動であり、呼吸と同じことであると信じていることです。私が持っている観念は否定しなければなりません。それが私の検証する方法です。そして、もしも否定することが時宜を得ていないと思われたなら、その時は否定するのを急ぎます。如何なる懐疑もありません。反対に、その様に認識の樹木を揺さぶると、美味しい果実が助かって、悪い果実が不用になるのを私は確信しています。この矛盾した反対する精神は、多くは私自身に関してしか最早働きません。何故なら私は他人に反駁する気になりませんし、作家たちにも又反駁しないからです。最も安易な発展に従って本性から行った者は、寧ろ私には恥であったと思っています。決して報われないこの種の美德を、私に伝えたのがラニョーというお手本であると私は信じています。危険な状態に私を投げ入れるためであるかの如く、一瞬で観念を見捨てるこの習慣を持ち

ながら、如何に自分を支えられたのか私には分かりません。それは大変に上手くいっている文章を破くのと殆ど同じことです。そんなことが百回も千回もありました。そこから私の言うことを聞きながら形作られた最初の観念は、支離滅裂で信じられない程に混乱していました。更にもっと信じられないことは、私を判断しなければならなかった人々が、忍耐強く私を待っていてくれたことです。その上で私が教わったことは、プラトンが冗談に言っているのを除いて、誰も私に言わなかったことですが、反対することが思考の活動そのもので、観念に肉体を与える唯一の方法であるということです。それは熱いと冷たい、重いと軽い、大きいと小さい、というようなプラトンが冗談から素描した反対のものに著しいのです。そこで大いに思考したので私は、これらの反対のものがお互いに切り離し難く結びついているのをついに見付けたのです。物体を小さいと判断しても、もしもそう判断しなければ、それと同時に大きいと判断することも不可能なのです。そのことは或る領域の広がり全体に眼を通して、その観念を走り回らせるしかないのです。青の性質は可能な限り全てが青ですが、その青の系統が消え失せる時の白も含んでいるのです。蠟は固い液体であり、蠟燭は柔らかい固体であると言った英国の物理学者マクスウェルに私は驚嘆しました。ここでは、反対する喜びは、何もかも導きません。しかしそれは、固さが圧力との関係で、最も固い物体が流れを生む前の十分な圧力しか考えられないというもっと隠された概念を準備しています。プラトンが熱いとか冷たいと言っているように、液体と固体は何時も各々を判断する時にも、一緒になった全体の中にあるということが人はこの例から気付きます。私は、私の精神が何時も気に入っている領域を読者に散歩させましたが、事物の性質について確実に思考することは、千回に一回も成功しませんでした。しかしながら私は拘束を逃れて、わざと破壊して大混乱を生むものに取り囲まれていました。

ヘーゲルは、素晴らしい観念を発見しましたが、それは各々の観念の中に相反する同一性を大いに探究したので、確実さと内実に溢れていました。容易というものへの拒絶が、彼を指導させるものになります。但し厳密に言うなら、私は第一次世界大戦後かなり経ってから、初めてヘーゲルを知りました。当時、私が拝聴した人々は、ラニヨーでさえも、ヘーゲルは経験を演繹した人であったと考えられていたようでした。実際に、まさに銜学者の頂点の人と思われていますが、ヘーゲルにおいてその様なことは何もないのです。反対に彼の自然哲学と、結局のところ精神哲学は、純粋な論理が不足した結果です。そしてヘーゲルの体系を要約してある単純な『エンチクロペディ』の読者は、この問題に関するあらゆる疑問を取り除いています。しかしながら私には、今日の官学の思想家たちも、私が勉強していた当時に大小の先生方が考えていたことを、ヘーゲルについて考えていると信じる理由があります。このことは私にとって不可解です。恐らくヘーゲルの哲学は、教えられた哲学に恥をかかせます。いずれにせよ、この困難はラニヨーに味方しませんでした。しかし、それに反してプロシャ人であったこと全てに対する偏見が、ラニヨーには非常に根強くありました。私としてはこの種の偏見がありませんでしたが、それは寧ろ私の精神と言うよりも私の気質によるものと思われまふ。何故なら私が敵を望む時も、持つことが出来ないように出来ているからです。そして自らに生まれて来るような小さな邪悪さも、想像しての憤慨であり、短時間しか続きませんでした。この点に関しての私の中の怒りは、直ぐ

に喧嘩を始めなくても、余りに活発で活動的であると私は信じています。そして二、三度続けて起こった経験から私は、他人に関するあらゆる実践上の判断を拒絶するまでに慎重になりました。思考し行動する私を見る人々は、この冷静さを時々激怒することもありました。でも、それは決して冷静ではありません。兎に角、そんなことはどうでも良いのです。重要なことは、私がヘーゲルを知る前から分子としてヘーゲル主義者になる習慣があったので、何の困難もなくヘーゲルと一緒にになったということです。その反対にヘーゲルの体系には、その他のものと同じ様に驚嘆しませんでしたし、魅惑ありませんでした。体系とは手段とか研究方法でしかないとは私は確信していたからです。風車から出来る小麦のようにヘーゲルから降りて来る真実に関してその様に私は認めていましたが、少なくとも別様にも明らかになりました。私はそれを糧にしましたし、訓練にもなりました。私を良く知っている人々は、私が本をめちゃくちゃにするのを知っています。同様に、著者もめちゃくちゃにしますが、プラトンだけは彼自身でめちゃくちゃにしていますから例外です。しかしながら長い間に解体したり逆にしたりした後で、幸運にも私は、それらがあるが儘だった姿を屢々再発見します。そして、その冒険は私の仕事において何度も起きましたが、それはその著者から遠く離れながら難解な数頁を説明することであると信じました。従って私は発明しているように見えました。しかし次の頁には、私の様に言っていたことが良くありました。

こうした訳で、疲れ果てさせる仕事のイメージを人は作りますが、職業は全力でやりますから、その後それが本当になりました。しかし勉強中に頭を痛めることはありませんでした。私は構築し破壊しますが、結局私は極めて怠惰でした。私はそれを後悔していません。無頓着になったり休息したりすることは、既に今では全てが私のやり方です。私は思考することを延ばします。そのことは大胆に把握することが許されます。誰もそのことを言いませんでしたが、そんなことは何でもないと言うかもしれません。しかし私としては怠惰からの思想に驚嘆しています。それらの思想は、私が野心を抱いていた時に夢見たものを、遙か遠くに追い越していました。

試験と入試の話に戻ります。私は成功と失敗を知りましたが、著しく人より遅れた訳ではなく、何時も好意的な意見に支えられていたと少なくとも言えます。しかし、高等師範学校での三年間は騒々しかったですし、自由奔放でした。私は二人の文法学者の教授しか真面目に受けませんでした。リーマンのラテン語とトゥルニエのギリシア語でした。二人とも思想家でした。私は直ぐに貴重な人であると確信するようになりました。何故なら疑うからです。もしもあなたがリーマンにキケロの一節の意味を質問したなら、赤毛のこのドイツ人は、その様なことは知らなかった人のように脅えるのでした。難解という雲が湧き上がりますが、直ぐにそこに宝石のように明瞭で、証拠に基づいて築かれ、議論の余地のない唯一の意味が表れます。老人のトゥルニエは（リーマンは若かったです）、更に一段とびっくりさせられました。というのも、例えば古代ギリシアの詩人ソフォクレスの詩句に意味が見付かったなら、何度もびっくりするからです。如何なる写本者が重大な写し間違いを良くして、次に如何なる知性的な文法学者がそれを当然に間違っって訂正したかを、トゥルトリエは探究していました。彼は専ら、理解しないようにしていました。それにも拘わらず、彼は貨幣のように美しく尊敬されていました。彼が、歴史学者の

ラヴィスと衝突した時（彼はラヴィスについて歌を創りました）、私たちは彼を名誉に思っ  
一種の騒乱を起こしました。

子供の騒乱には如何なる思想もありません。政治は未だ高等師範学校に入って来て  
ませんでした。そのことを信じるのは困難でしょう。何故なら、社会主義者とか君主  
制擁護者とか神秘主義者がいたのは、私たちの世代の少し後のペギーの世代である  
からです。しかし、それらの問題は私たちに関係がありませんでした。当時は、図  
書館員で既に高く評価されていた社会主義者のエルは大変に恐れられていたが、  
影響は未だ殆どありませんでした。私の周りに社会主義者は一人もおりません  
でした。ブーランジェ運動は何の動きも起こりませんでした。ドレフュス事件は  
高等師範学校を揺り動かすことになりませんが、私が話しているのはそれ以前の  
一八八九年から九二年までのことです。バレスは仲間うちで読まれていたが、誰も  
真剣に論じていませんでした。ジョレスは全く知られていませんでした。私たち  
は純文学と色恋のどちらかに分かれて読んでいました。野心家たちの心を動かす  
考えは、出来ることならパリで何らかの新聞に這入り込むことにありました。お  
金持ちとの結婚という考えさえも、もっと後になってからでないと出て来ません  
でした。当時の人々が先ず望んでいた栄光とは、サント＝ブーヴ、ルナンあるい  
はテーヌでした。その様な人々が、当時の神々でした。しかも未だ存命中だった  
テーヌは殆どあらゆる人々の関心を惹き付けていたが、そういう意味では彼の  
家の夕食に招かれることも不可能ではありませんでした。恐らく、私たちは真実  
への一種の強固な愛情を全て抱いていました。しかし私たちは、そのことを知ら  
ないでいました。

私は直ぐにこれらの権力者たちに対して自分を確立してました。テーヌの『知性  
論』とか、少なくとも『ナポレオン』を読んだとしても、テーヌに対して敬意を  
払うことは出来ません。私はそのことを言いましたし、叫びもしました。私は狂  
人のように見られましたし、それは今日でも同じことです。私は機会があつて  
サント＝ブーヴを攻撃する時も又、殆ど理解されません。ルナンには今でも  
支持者がいると私は推測しますが、私はルナンをそれなりの地位に戻す苦勞を  
負うまではしません。彼自身によって降ろされたのです。彼の『マルク・オレ  
ール』や『イエス』を読めば十分ですし、それらは両方とも人間に対する犯罪  
です。しかし私のいる世代やその次に属する世代が、これら三人の悪しき師  
たちを崇拜していたことは間違いありません。それ故に私は独りでした。殆ど  
誰もついて来ませんでした。しかし私は尊敬されました。私は友人たちに好  
意と親切を発見しましたが、その前に先生方にも同じものを発見しました。全  
ての人が、心の中では私に賛成して褒めていたと私は推測しています。ブリュ  
ンティエールでさえも、態度が非常に悪かった私に対して何時も特別に扱っ  
てくれました。私は彼の鼻先でプラトンを読む振りをしました。彼は私のこ  
とを笑う程、大変に強い人間でした。私が先程述べた三人の文学の番人たちの  
名前を、新しい口調で大変上手に表し続けていて、殆ど全員を支配していたの  
は事実です。ブリュンティエールは、恐らく彼が必要と感じていた反対者とし  
て、本当に心から私を励ましてくれました。私は大変に具合良く、そしてあ  
らゆる雑誌を覆っていたその後のつまらないものに反対して、正しく出発した  
と今日でも私は信じています。私が狙ったのは、中心人物のいない批評で  
した。私は上手に狙いました。その結果、恐怖を撒き散らしましたが、その恐  
怖には皮肉と

韜晦が混じり合ったものによっていました。私の言うことを真面目に受け取られたことに、今でも私はびっくりしています。これらの悪賢い人々の中には、猪のような見方と態度のペロ校長もいましたが、私は彼らが私の激しい不服従を大変良く判断してくれたと結論を下しています。しかしながら彼らは、自分たちが良く知っていた深淵に沿って、私に危険を負わせて走らせていたのです。

社会主義者のエルと私は理解し合うべきでした。しかし、そういうことは全くありませんでした。私たちの間には、凄まじい程の誤解がありました。それは恐らく節度のない二人の戦士の衝突でした。お互いの罵倒は、最も感情を傷付けました。沢山の言葉を知っていること、沢山の本を読んでいたこと、そして博識というあらゆる大砲で知性を粉々にしていると言って、私は彼を非難しました。彼は私を、無知で、怠け者で、軽薄で、治しようがない者として扱い、小劇場や『パリジェンヌ生活』程度と考えていました。彼が私を警告したのは正しかったのです。その後、私を尊敬するようになり、大変率直になってから大分長くなります。彼は、何でも全て出来たのです。彼は人物や物事を正しく判断するので、私は屢々関心しました。あらゆる権力に対して示した彼の動じない勇気は、多くの人々に対するのと同様に、私に対しても長くお手本になっています。でも、時々ですが私は彼の限界も見ました。精神の創造部分は、臆病でいららしていたのです。

しかしながら、私は学生として課せられた仕事もしました。優ではありませんが、可の程度にはやっていました。しかし、本を拾い読みするのではなく、隅から隅まで読むというやり方を私は常に行っていました。私はプラトンを全て読み、アリストテレスも殆ど読みました。カントの作品にも入り、直ぐさま非の打ち所のない学派の総帥を認識しました。しかし、私は大騒ぎや罵倒のうちに、多くの無駄な時間も過ごしました。トランプ遊びにも耽り、夜になると生活の一部を占めていました。その時は、遊びごとが大好きであると信じていました。それは何ものでもありませんでした。私は容易に全てを楽しみます。

この三年間で、私の中で明らかになったことは、意志に関する見解だったと思われれます。アリストテレスがそれを助けてくれました。何故なら、独創は個人の発展によって知性を超えて行われるというようなやり方で、私は彼を理解したからです。この考えは、アリストテレスの〈神〉の中にありますが、それは運動とか肉体の神を元にして、知性を通過して精神そのものまでに精神を高める偉大な諸段階を、その不明瞭な作品の中に認めるのを条件としています。この素朴な詩に心奪われて（というのも写本者が途切れることがなければ、アリストテレスの様式は最高に美しいからです）、私は殆どプラトンを忘れるようでした。この三年間に良く会っていたラニョーは、私の変わりようにびっくりしていました。私はそれが良く感じられました。しかし彼は、軽々しく忠告する人物ではありませんでした。

アリストテレスの次には自然に、ストア学派（禁欲主義）の人々です。この哲学は、全てが断片的で屢々不可解であり、私が生まれて初めて博識を勉強する唯一の機会を与えてくれました。当時、ストア派のテキストの選集は未だ使われていませんでした。煩わしい退屈な多くの作品の中で、私はストア学派を探究するために勉強しました。ディオゲネス・ラエルティオスが退屈で

なく、駄作でもないのを知ったのはその時です。セクストゥス・エンピリクスを詳細に調べるのは容易ではありませんでした。最悪なこともありました。それはツェレルが書いた本に従って、引用を確かめることに限定しなかったことです。でも、実際に本を読むのが好きになったのもその頃です。私が考えるに、この頃の無駄な時間は私の思想の元になっています。そして私が何故歴史を勉強することが出来なかったのか、それもその頃に疑問を抱き始めたのです。私は歴史を要約して認識するしかなかったからです。従って、歴史は私に何の感動も与えませんでした。歴史からは、人生の本当の発条（ばね）が分からないのです。その後、私はサン＝シモンの『回想録』、レスやナポレオンのものも飛ばし読みをせずに、三回以上読んだことを言いたいと思います。他にも大して重要でないものも読みました。そして私は結局のところ、歴史の部分部分が幾つもあることを知り、そして認識しました。

ここからは、私がストア学派の人々から発見したものを説明しなければなりません。それは少なくとも人々が知っている高慢な諦念ではなく、力への陶酔のようなものです。勿論、それもつまらないものではありません。しかし、その理念は力そのものを想定しており、望むことの働きを口論の上に置いています。何故なら必然性とか運命の理念は、明らかに英知全体の一部ですが、たった一つの運命が最早何ものでもないのを理解させる深く隠された理性を眼で見ることを失うと、それは全体に広がる危険があるからです。というのも、私を諦めることは私が原因ではない、と不幸な人々は言っているからです。私はあり得るものとして何時も存在しています。ところがこの観念は多くの精神を殺しました。私は致命的な一撃から逃げるために何時もそれを避けていましたが、観念の根源まで見詰めない限り、その後は十分巧みに避ける確信がありませんでした。アリストテレスは全く自由ですが、自由が自然の底に隠されているまさにそのことによって、恐らくその時人は自由を信じられないのです。自由であっても、神は各人の自由にとって何時も危険です。私は、余所者の神のことを言っているのです。ストア学派の人々は、認識する意志もなく世界と同じ意志を持つことを求めながら、更に追い詰めたのであると私には思えます。そして彼らの表現は非常に難解ですけれども、大変に心を打ちます。というのも当時は論争的であった真実の規準を探しながら、真実は探究する意志の緊張そのものの中にあるとか調子にあると言われていたからです。間違いを言った時でさえ、逆説を倍加するためであるように、賢人は決して間違えないとつけ加えていました。それは強烈です。彼らが言った例の一つは、反対のことがその観念を私にはつきりさせてくれました。というのも、今は昼であると真昼に叫んでいる狂人は、真実を掴んでいないと彼らは言っていたからです。残りの全てを見抜かなければならないからです。何故なら手を開きそして閉じて、次に握り、更に次にもう一つの手で握り、認識段階になると力を入れて表しますが、それは何時も熟考することを勧めるしかないのです。そして当時、私にとって躓きになったのは、思考する意図を持った人々が感激で火傷することなく、これらのテキストを手にとっていたと分かったことなのです。殆ど全ての人々の第一の関心とは、新哲学を発見することであり、そのことは古い哲学を少なくとも批判すべきであることを前提にしていたことを、その後私は理解しました。新哲学を発見するのが可能である、と私としては決して信じませんでした。そして私は、最も卓越した人々が言いたかったことを再発見するこ

とで十分でした。人間は継続し続けているのですから、そのことは最も奥深い意味においては創造することと同じでした。しかしヘーゲルの巨大な観念を私が十分に理解する前に、理念において全てが真実である前に、そして思考するとか探究するのを人が望むものは何でも時流に便乗するとか飛躍していなければならない前に、全てが真実であったり間違いであったりするようない瞬の観念の後でさえも、その場所を深く掘り下げるための諺のように感動的な表現だけで私は十分でした。私はそれ故に、現代の認識にストア学派の準則を適用しました。例えばコペルニクスの天文学です。そして真実を言った多くの狂人たちをその時知ったのです。しかし何によって彼らを知るのでしょうか。彼らが真実と言っていることについて私は考えました。ところが自覚のある人は、世界をより正確に把握するための方法のようにしか自分の観念を少しも用いません。幾何学を知っている人々は、何かを知っていると信じているのを私は理解しましたが、その時の彼らは真実にとって最良のものを知る方法しか身に付けていないのです。人はそれも同様に適用したいのです。結局のところゼノンやクリュシッポスにとっては、真実の徴であった〈捕らえられ、そして捕らえるイマージュ〉を何であれ、私は説明させるしかなかったのです。精力的な探究が真実の徴である、と言うのも同じことです。私はこの理念をデカルトに再び発見しましたが、確かに彼はそれをストア学派から取って来たものではありませんでした。寧ろデカルトは、ストア学派の人々よりももっと難解に私には見えませんでした。恐らく、意識的に難解にしているように見えませんでした。何故なら、注目すべきことですが、真実の商売人たちの間には、彼らが主意主義と名付けたものを高所から反駁するために、何時の時代でも雷同しているからです。彼らの眼は、まさに一種の病気なのです。

そこから私は反対に、更に非常に抽象的ですが大変に頑強なラニョーの理念を私自身のために自分に説明する方法を見出しましたので、私が商売人たちの議論の中で無駄な時間を持たず、彼らを監視する役目もなく、例外なくあらゆる教条主義者たちと直ぐに縁を切ったのも、決して気紛れからでないと思えます。私は何人かの本物の偉大な人物たちと一緒に道を進みましたし、その他の人々は私にとっては存在しませんでした。そのことについて人が言ったことや言うであろうことを、私はまさに無視しなければなりません。唯一のことに真剣になっていましたが、それは出来るだけ愚かなことを言わないようにすることであり、私自身が理解しなかったことを教えないことです。私が言うことを偏見無く聞くなら、そのことは直ぐに明白になるでしょうし、教授としてとやかく言われなくて済みました。難関を切り抜けたのはそこからです。しかし、私は誰にも要求しません。生徒のうちで出来の良い者たちにさえ要求しません。何故なら、私は審判者を認めなかったからです。この点について、私自身がびっくりする程の無関心を押し通しました。というのも一度ならず、私の理性は一種の大衆の気に入らないことに気付いたからです。例えば宗教についての見方は、大分後で『神々』で形あるものにしましたが、私が先ず披露した小学校の教師たちには殆ど気に入られませんでした。その主題についての私の実際の思想は次のとおりです。「恐らく、結局は彼らが正しいのです」。福音書のありふれた批判や、司祭に対するありふれた政策は、一方の人々に都合良く出来る文化や考察の一方法である、とそこから私は言いたいのです。私のためではありません。そして、そこから全てが定

められ、私は信じることを絶えず拒み、点検するのを主張する者たち全ての友人です。

私はこの理念について今では、確かに判断における意志というラニョーの考えを強調します。少なくとも私としては、それを十分に明らかにすることを考えています。殆ど誰にも興味が無いと私は信じています。そして私が言いたいのは、それに興味が無い人々は如何なる問題においても言うべき新しいことを何も発見しないで、死者や生者たちを目覚めさせる如何なる方法も無いということです。その代わりに、例え私が経済学とか文学を論じるとしても、常に読者の感受性のある急所を突くことを、私は経験によって知りました。そして私が一番良く説明出来ることを、ここで言いたいと思います。それは、私が経験の中で発見する第二次的あるいは第三次的思想というものは、私が第一哲学と名付けていて、もしも私がそれを論じるなら事務所を整理するとかカーテンを付けるための技術を最も明瞭に引き出すもので、何時も実際には全く難解で曖昧な哲学から齎されます。私は、この秘密の関係を何時も良く見ます。でも何時もそれを示すことが出来ないのです。

私はここで思想から経験までの関係に触れます。少なくとも経験にならないようなものを認識として理解しないように私は言いたいと思います。私は出来る限り一つの指数に基づいて、もしも人がゆっくりと準備することを斟酌しなかったなら、驚くほどに迅速に、人物や事物を認識しました。近年、つまり私が高度な研究に入って四十年以上経ってから、私は有名な歴史家から手紙を貰いましたが、思ってもみなかった讃辞にも、何の借りもありませんでした。「現実を認識し、敢えてそれらを言うアランへ」と彼は書きました。私は嬉しくなりました。しかし、そのことは別の冒険を呼び起こし、結局のところその人物に一つの見方を与えていましたが、それは当然に疑い深いこの種の人間に代わる、より大きな友情です。

私がルアン新聞で読まれ始めた頃、つまり一九〇六年から一九一〇年頃に、かなり権威ある批評家がリーニョ公（1）の言葉を注釈して、人はもし大事件に巻き込まれなかったなら、その大事件を何も変えることが出来ないと言い、その箴言の例外としてルナンとアランの二人がいるのを知っている、とつけ加えました。それは滑稽でしたが、私はそのことを意識しました。もっと適切に言うなら、それは作者を殺すようなものでした。そして、まさに彼の指示で私に起きたことでした。というのも私は偶然聞いたのですが、ずっと後に近年になって同じ批評家が、教授は人生のことを何も知らない、と私のことを言っていたのです。そして、私が退職して少しは本当の人間性や興味や情熱に近付けば、その時は最早書かなくなることを少なくとも希望する、と彼は言っていました。そんな具合で、一つの行過ぎは他の行過ぎを直します。確かにこの批評家は、最初に言ったことに赤面しましたが、赤面して正しかったのです。そして彼は、称賛よりも確かに正しい最近の厳しい態度にだんだんと近付いて来ましたし、影響力も出て来ました。教育は大変良い地位にありません。人はそこで実体もなく屢々思考します。調整されることなくあらゆる方法を思考します。従って年々自分だけの観念をより良く構成するのに応じて、だんだんと町の通りのことや現実の状況と関係ない者に見られることはあり得ます。私はこの職業の不都合から、全く逃れることが出来ませんでした。今、私が言いたいのは次のことです。もしも私が、同僚たちと並んでどうにかこうにか現代という時代と関係を持ち続けているとするなら、あらゆる

ることに役立つ機会を持つ大変に古い観念で何時も思考していた、と信じています。そしてその準備として私は多分、経験からも取り出しましたが、それはあらゆる人々が取り出しているものであり、反対に最新の観念を追い求めようとする人々には不足している認識である、と私はつけ加えて言います。私が如何に石器時代の方法で多くを取り出したのかを次に説明したいと思えます。ラニヨーは或る日、私に言いました。彼は病気の回復期に、中庭の巻揚げ機しか事物の対象にしていなかったし、そのことが彼を教育していたとのことでした。恐らくこの例に倣って、私は全てのメカニズムの秘密を巻揚げ機に絶えず求めました。その意味において、私にとってそれは井戸の水を汲み上げることが既に、今日では精神的な生き生きとした喜びになっていると理解しています。そして大事件に関してもそんなものであり、ナポレオンのような人の術策も、栗を売る商人の術策と似ていると私は信じたいと思えます。この様に書いても、私はその人物を決して低く評価したにののではないのですから十分に注意して下さい。その反対です。

批評家や批評家の力に関して、私が一言言う丁度良い機会です。私が如何なる作品も決して批評家に送らなかったことを人は知るでしょう。それは軽蔑からではありません。寧ろ、作品を公表することを私に思いとどまらせる批評家のこの力を、私は認めていました。それでもこの力は不公平であると私には思われますから、批評家の意見や誰かのものを知りたいと思う気持ちが少しも無いのです。私の喜びは書くことであり、書かれたものが印刷され姿を変えたのを見ることです。でも、私の作品を読むように少しも人に勧めませんでした。そして一寸した行き違いとか、原稿の一頁に私の気に入らないことがあったとか、出版社からの返事が遅くなって書かれたものが封筒に入った儘読まずに置かれていたりして、私は最早そのことを考えませんでした。屢々それで十分でした。書いている限り、私は誰も気にしません。出版に際しては私に数々の讃辞とか要求があるに違いありません。もしも次々に作品を引き出したと言える〈良き神々〉に私の全生涯が囲まれていかなかったなら、何時も栄光とか不安に支配された〈悪き神々〉が大変容易に私を沈黙に帰していたに違いないと言えるのです。（完）

（1）リーニョの王子であったオーストリア人の元帥シャルル・ジョゼフ（一七三五～一八一四）は、七年戦争（一七五六～六三）で戦った。

## 五 ロリアン

高等師範学校での三年間は、私に十分な観念を与えてくれたと考えます。最終的に成功したかどうかは決して問題ではありませんでした。ですから試験への不安はありませんでしたし、如何なる種類の恨みもありませんでした。私は、あるが儘に自分を示しました。少なくとも危険を負っているとは理解せずに、極めて無謀に考えていましたし、実際に何の危険もありませんでした。私は〈利己主義〉や〈愛他主義〉の授業を思い出しますが、それを考えると今でも顔が赤くなります。限りない信用が青年に開かれていることを知らなければなりません。

私は修行時代に至りました。職業が待っていましたが、私は何も想像していませんでした。取分けプラトンやアリストテレスの本が入っている荷物を、最初にひっくり返して開けました。尊敬するに足るこの二人の亡霊を冥府から呼び戻した時、私は授業計画の問題は全て解決済みであると信じました。それはポンティヴィ（1）でのことでした。私は、二つのクラスを合併して教えました。生徒は全員で三名でしたが、その中の一人は頭では理解していても何も理解するまでになっていませんでした。全員がバカロレアに合格しましたが、私はびっくりしませんでした。発見したのは、驚くべき思想の風景でした。古代人から始めれば、正しく始められるということとその時すっかり理解しました。すなわちプラトンは全ての時代に存在するのです。修正すべきことは何も理解しませんでした。その代わりにアリストテレスは、経験と照らし合わせると真実に変える尊敬すべき間違いを沢山集めています。下位の神々である彼の天体は、あらゆるものの中で最も完璧な円運動を探究し、愛しているのを手本にしたいと思っています。もっと適切に言うなら、物理学の神は無限の速度の円運動でしかなく、そのことで不動にもなるのです。ここでは全てが間違いですが、熟考によって全てが真実にもなります。というのも円は、曲線の父であるのは本当であるからです。アリストテレスは時々、宇宙の歴史の様相で精神の歴史を書いているように見えます。私はこの思想から薫陶を受けました。プラトンに戻ります。そうしなければなりません。しかし、プラトンも同様に余りに厳しいのです。何故ならプラトンは過ちや、殆ど自己から自己への罵詈雑言のために、所謂経験による間違いに絶えず立ち戻るからです。まさにその時は、永遠の人プラトンの前で人が勝たねばならないゆっくりとした変化や、ゆっくりとした進歩や、歴史の力に頼ることを考えない時です。一瞬で全ての正義と不正義を選択させて、それが全ての瞬間になる『国家篇』のソクラテスの前では、全てが妄想です。最早ここには運命はありません。あるのは過失と罰であり、もしも望むなら全てを新しくするために洗うことです。千年とは何でしょうか。その時間は思考する者には短く、欲望を抱く者には長くて限りありません。何らかの同情がなければ、誰もこの種の許しは余り好きではありません。各人は斧の一撃で自分の指を切るのです。しかも神は無罪です。私たちが良く望まない限り存在しないこの明晰な宿命に、私は心を奪われました。しかし何と危険でしょう。そして何という永遠の生命なのでしょう。

この光の哲学が何時も保持された儘になっていることを十分に知りながら、私はアリストテレスと共に農民のように大地を再び耕し始めました。私は、適当な本を図書館で探しました。教授

の反復や脱線や躊躇を表していると言われたこれらの断片的なテキストを、私は一行ずつ注釈しようと思いました（沢山の人々がやった後にです）。しかし、何という詩でしょう。アリストテレスは、先行していた哲学者たちのことを言いました、「全ての人々には道理がある。何故なら誰にも入口が許されているからであろうか」。そして奇妙な道によって笑わせる道理によって、今まで書かれた恐らく最も奥深い思想に、私たちが投げ入れるのはアリストテレスです。「それ故に、彼（神）は彼自身を思考する。そしてその思考は、思考の中の思考である」。これらの驚異に倣って、私はそれ故に全てを理解し、全てを救おうと試みました。私のアリストテレスと偉大なノートは、テーブルの上に置かれていました。絵画は私の唯一の休息でした。そこで再会した友人と一緒に私は走り回りました。私たちは絵の具とキャンバスにお金を浪費しました。でも私は、詩芸術よりも絵画には向いていないことを教わりました。私は部屋に戻って、一頁又一頁と書き加えました。そして、そこから教室にいる三人の生徒のために、あらん限りの声と雄弁で教えに行きました。この様な生活をして約六か月後に、私は過労の兆候を初めて感じました。そのことに如何なる考えも私にはありませんでした。何故なら、それまでは決して孤独の中で勉強したことがなかったからです。もっと正確に言うなら、修道士の独房のような中で勉強したことがありませんでした。私は死ぬかと思いました。一か月間病気になる、三か月間休職しました。私は生きる術を知りませんでした。

ポンティヴィでの教員としての修業時代の最初の一年の後にやって来たロリアン（2）で、私は先ずチェスの遊びと、気晴らしのための絵画を描きながらも、修道士と同じような生活を送りましたが、生徒の数も増えて、秩序を維持する必要性から仕事も少し増えました。序でに言いますが、秩序を維持する必要性とは、外見上は容易に見えましたが、実際は何時までも私を苛々させましたし、その中で権威とか威厳と言われているものを持ちながらも何時も疑い深くなりました。それは原因を理解していたからです。つまり日々次々に生まれる軽薄さであり、笑いの幸福さであり、騒音を生むあらゆる肉体の感染であり、生徒たちにあると仮定するのが望まれる愛情と尊敬の気持ちでもある軽快さではありますが、それらは正しくもあるが弱く、本質的に根が無く、ほんの僅かなことでも飛ばされて行く藁のようです。この苦い考えは、私が仕事をしている時間中は絶えず占領していたので、私には非常に重荷でした。非常に根拠のある慎重さを持っていても、私は生まれつき何時も不用心でしたし、用意周到に準備していた時でさえも即興的に創ったり、喜劇役者的行いを拒みませんでした。これは危険なことです。しかし私は、何時もこの役を演じていました。それは私が後悔することもなくこの仕事を去り、素直に言うと言った理由の一つでもあります。

この曲芸師としての演技には、二時間でへとへとに疲れたことは想像出来ると思います。ところが決して止まることがなく、独自の進歩で大きくなり、膨大な書物を幸いにも読んで理解し、手が疲れる程に書く注釈者としての仕事をずっと加え続けていたので、とうとう私は自分が本当に病気だと感じて、若い盛りに死にそうな自分を見て、絶望を自覚していました。私は何から何までも間違っていました。私は四七歳から五〇歳まで参戦した後なら、この様な年齢を気にしないでいます。実際に当時よりも、私は動物的なものに今は満足しております。三年前に、所謂疲

労というものの秘密を知ったのです。激しい発作によって知ったように、それは私の左耳の病によって起きる眩暈でした。しかし、それは如何なるものでしょうか。本当に死ぬかと思えます。それに反して、そのものを良く知った時、想像力は立て直されて、空想上の原因による痕跡に沿って走らされることは決してありません。殆ど全てが想像上の疲労という極めて現実的な理由にここで気付くことは、有益であると私は思いましたし、それは私の教育活動全般に付きまといました。確かに私の労働の方法はそれによって変わりました。私のあらゆる種類の野心も、消えないまでも鎮められました。そして、それと同時に陰鬱な観念に打ち勝つことも覚えましたが、それは哲学者の試練です。私が話をしている時代は、その様な考察を行うどころではありませんでした。少なくとも、短くて困難な人生を余儀なくさせられていると自分で理解していました。いずれにせよ、憂鬱な思考の中で、例え私には確信がなかったとしても、広汎に労働することは当時諦めなければなりませんでした。でも、それは良かったのです。そして隠れ家を出て、大変に陽気で活動的な町の中に足を踏み入れました。そこでは二人の友人に再会しました。ロリアンでの六年間は、一種の夜祭り生活で、私の憂鬱も治してくれました。その時に植民地兵や航海士の世界も少し知りました。そんなにも遠くへ行かなくても、船や大砲のことを考え始めました。それは常に私の思考の巻揚げ機でした。上昇する砲弾が落下の法則により、或る唯一の一瞬から絶えず落下するのが私には驚きでしたし、今でも驚いています。私はそこから天文学へ戻りました。私は至る所で疑問にぶつかりました。天体の軌道が如何にして大砲の軌道になるのか、私は理解しないで幸いでした。そのことは、私が少し知っている専門家の大尉には分かり切ったことのように思われました。勿論です。でも、私が何かの説明を求めた時、この理工科学校卒業生は自分でも理解していないことが私には分かりました。プラトンが突然に私を照らしました。真の意見は学問ではないと私は理解しました。その大尉は、私が彼に負っているものを知ることはありませんでした。しかし何故、野心や権力や阿諛しか見付けることが出来ない金モールの服の下で、思想を求めのでしょうか。私は何回も経験しました。そして厳しいプラトンが私に言っていることを思い出しました、「お前が望んでいるものを、お前は手に入れるのだろう。不幸者よ」。それは屈辱の連続で、私自身の中よりも私に似たものの中で、より多く敏感に影響され易くなっているのです（各人は自分の背中に書かれた宣告を負っている、とプラトンは言っています）。それは鏡の前での屈辱の連続で、私は用心して自分で一種の偽装を負いましたが、私を知っている人々にとっては非常に危険でした。私は原則として、少ししか知らないことは信じないことにしました。そして、他人が言っていることを明白にするためにしか議論をしないことにしました。この薬は、他人にとっては良いものではありませんでした。何故なら、屢々彼は最早自分が分からなくなって、自分で考えている以上に愚かなことを言ったからです。そうでない時には、私は反論者たちを走り回らせて、荷物を負わせて詰め込んだことに注意して下さい。というも人は何時も賢者ではいられないからです。そこから私を十分に知らない人々に、極端な不信を私は何時も感じるようになりました。仕方ありません。プラトンの世界は悪くないし、良くもありません。しかし、その照明によって恐ろしいものです。真の意見は学問ではないので、人は絶えず全てに恥じるのであり、それが善であっても恥じるのです。恐らく私は、最後に良識

への恐れという何らかの観念を与えるのででしょうし、それは全てが明白になります。その観念に関するものに、何ものでもない愚かさを突然に照らします。そして、一つも奥深いものがありません。というのも私たちの仲間である諸器官、手や顎、長い足、飽くことを知らない腹、不幸の鏡である肝臓も又全てが奥深くなかったからです。もしも見る術を知っていたなら、それらは思考しないダイヤモンドです。私は、樂園という恐ろしい明るさの下で、でこぼこした道を出るだけのことをして歩きました。私は、私の魂を器官で一杯にしませんでした。人が何も見ていないこの明るさで、魂は全てを十分に行わなければなりませんでした。しかし、私はここでアリストテレスの全てに敬意を表します。そして公平であるために言いますが、プラトンの子供たちは、「もしも十分に望んでいたなら」、救いが确实である限り、無礼で軽率です。結局のところ彼らに宗教はありません。過ちを正して濃くすることを知りません。あなた方は彼らがいる場所を非難します。彼らは最早、既にそこにおりません。彼らには悪徳も最早、美德の役割を果たしております。悲しむ術を決して知らなかった全ての悲しい人々に、私は許しを乞います。

私が如何にしてプラトンに戻ったのかを理解されるなら、恐らく軽薄さからです。しかし他にもきっかけがありました。私が愛好家の素人の儘で功績もなく出席した地理学学会によって、私は地理学の研究に身を投じました。ブルターニュ地方の土地を一つずつ研究しました。グロワ島（3）の未開の小さな谷で、古代氷河の跡も探求し発見しました。そこから自然なことのようには、全てを知るという観念に到達しました。私が地球や動物やあらゆるものの物理学についての知識も身に付けました。当時、私には全く単純で謙虚な生徒がいましたが、彼は数学の天才でした。私はどうにかこうにか彼にこれらの哲学を教えました。彼は全てのことを容易に理解しましたし、決して反論もしませんでした。彼は、天才の方法を沢山教えてくれました。というのも私は、未だ小さくて天才の雛を観察していたからです。彼は数年前に、パリ天文台の計算家として亡くなりましたが、恐らく彼が書いた論文は世界中で二人しか理解出来なかったでしょう。彼の名前はファトゥと言いました。私の考えでは、彼は数学者の不安によって死んだのです。そして彼のような人は一人ではありません。私はここで将来がある、全ての天才たちに一種の厳粛な忠告を与えたいと思います。彼らは、才能に恵まれていない方を彼らの裡で伸ばすように勉強すべきです。その時、彼らは喜びを手にするのででしょうし、立派で明るい未来が開けます。

お分かりのように私は美しい雲に住み、そこから大空と大地を判断しました。気晴らしは政治ですが、それは大変に乱暴なものでした。ある日、軍隊におけるあらゆる国の言葉の通訳でもあった同僚のドウヴィルが新聞を見せながら私に言った言葉を思い出します、「ドレフュスは絶えず無罪を叫び続けていたのだ」（それは罷免された翌日でした）。彼はつけ加えて言いました、「私は軍人を知っているが、彼らは二度と戻れない大変な間違いを犯していると思うね」。滑稽なまでに軍服を愛していたこの男の言葉は、直ぐに私の心を惹きつけました。彼の判断は乱暴でしたが、殆ど何時も正しかったのです。しかしながら私の膨大な読書は、決してしっかりした教養になっていなかったことも私は言わなければなりません。彼が戦争好きだったのは本当です。あらゆる人と口論して、言語学的知識が豊富でしたが、戦争中に司令本部で死にました。それと共に彼は物理学の実践家であり研究者でした。私が知り合った唯一の真の軍人でしたが、実際の

軍人ではありませんでした。

ドレフュスについての彼の予言は、文字通りに現実のものになったのはご存知の通りです。私は更に、その後の驚くべきことを述べたいと思います。私は戦後に、毛深い大尉と知り合いになりました。彼は良き友人で、見たところは自由な精神の持ち主でした。ところがある日、彼は私に言いました、「私には先入観はありません。従って、もし私の略歴を読んだなら、あなたはドレフュス事件問題について私が両派の主張を公平に信じて要約したことをお分かり頂けるでしょう」。私は彼に言いました、「あなたは大変ご立派です。でも結局のところドレフュスの無罪は異論の余地がない事実です」。彼は話を変えました。「この人間はドレフュス派だ。十分に予想しなければならない」と彼が考えたことは推測出来ます。

私は間違えたのです。私がドレフュス派になったのは本意ではなく、軍部派の新聞で読まれた実に多くの愚かな記事によってです。別な風に言うなら、私は参謀将校が自分の机の引き出しで指を挟まれた位のことであると冷静に見ていました。何故なら軍隊史を序でに勉強していたからです。これらの乱暴であるが慎重な人間たちの考えを、私は偉大と思っていませんでした。取分けスパイ行為や体スパイ行為に関することは特に全て軽蔑していました。この様にして私は、冷静な審判員の地位にいる自分を見出していました。しかしながら、高位高官たちが間違いを殆ど誇りにして、彼らは私たちを支配するのを想起させる機会にしようとしているのが明白になった時、私は反抗に身を投じましたし、ドレフュス派の友人たちを支援しました。私たちは軍隊を退役する時に、軍隊万歳を絶対に叫ばないことを誓いました。そして、小公園のベンチで議論しながら兵器庫の労働者や水兵たちの支持を得て、私たちは町の指導者になりました。そして私たちがさえも、もしも軍事クーデターが起きた場合には、自治団体にかなり近いものを準備しました。私はですから動物に、私としては情熱と言いたいのですが、身を委ねていました。そしてこの情熱の中で、私は多くの物事、多くの人物を批評しました。やがて私が政治的陰謀を分かり始めたのもそこからです。その様にして私は、手当たり次第にマルクスやプルドンの本を読み、反抗という全ての河の源流であったルソーの『社会契約論』へ遡らなければなりませんでした。

(完)

- (1) ポンティヴィは、ブルターニュ半島のほぼ中央に位置する町。
- (2) ロリアンは、ブルターニュ半島の南側に位置した大西洋沿いの町。
- (3) グロワ島は、ロリアン沖にある島。

## 六 政治

民衆の世界は目覚めた、と言われたに違いありません。民衆大学が直ぐに設立されました。全ての若者たちがそこにいました。私たちは町中や郊外で話しました。決して教えるためではありませんでした。民衆が考えていたことを、私たちは言ったのです。あらゆる圧制を暴きました。一部の真面目なブルジョアたちや何人かの陸海軍の将校たちも私たちの味方でした。私たちはその時、犠牲的精神に富んだ同胞愛を想定した雄弁を覚えました。そしてブルターニュ地方の田舎まで車で行きました。十七世紀からあるゲメネ＝シュル＝スコルフにおいて、ある日曜日に私は鉛骨にステンドグラスのある宿屋のホールで、大勢の農民の前で話をしたのを思い出しますが、農民たちは笑うべき処では笑いました。私は、悪魔が存在しないことを農民たちに証明しました。それから郡の議員が如何にして、まるでコルネットの音でスペートのクイーンを踊らせていたのか、私はもうその話の中身は覚えていません。彼は次に黒い糸を見せて、この奇跡のメカニズムを全て見せたのです。それは子供や大人たちに、想像力に対して防衛態勢を取らせるために、今日でも未だ大変に有効な方法であるように私には見えます。今日では大変に高い地位に就いている物理学者ですが、当時は力一杯の情熱と快活さで野生の時代が来たことを説明するために時々立ち上がっていました。古代ギリシアのアイソポス（イソップ）の息子である民衆が眠っていても、馬鹿になった人ではないことを理解させられるのもこの時です。民衆は見捨てられただけです。先ずは学ばなければならないことを屢々自問しました。でも、学ぶことは何もありませんでした。一方では奴隷であり、他方では自惚れと残酷さであるのを言うべきことしかなかったのは極めて明白です。私たちの観念は、とにもかくにもこれらの聴衆の中で、奇妙にも素晴らしく反響したに変わりないのです。確かに、私たちは平等に期待していませんでした。私たちは平等を提起しましたし、あらゆる危険も認めていました（私は今でもそうです）。しかし、もっと正確に言うなら、私たちは平等に全ての偉大さを見付けていました。共和制になるための良識が十分にあると私はその時知りました。私は抒情的で熱烈でした。余りにも早く亡くなった非常に親しかった友人は、最初は明らかにカトリック信者でないかと疑われていましたが、ギリシア学者とラテン学者と詩人の活動を既に沢山聴衆に行っていたのです。そして私自身は、その点に関して彼と論じました。彼は、ミサの際に非宗教的で非道德的なことがあったことを特には見ないと行って、大変強く抗弁しました。そして私たちの議論は激論に達したため、私は多く反省しなければなりません。人は軽率に発した言葉しか反省しません。いずれにせよ私もそういう言葉しか反省しませんでした。人は先ずそれらの言葉を最初に救い、そこに何らかの詭弁を見出し、思考の一部をなします。しかしながら、そのような安易さは恥じなければなりません。その時は教養ある声を上げて下さい。ところが私は、政治においては少なくとも先ず選択しなければならぬと確信しています。既に今でも自由に選択することに戻りますし、まるで証拠などは大したことはないかの如く、私は吟味する前に私の政治姿勢を誓います。ここから困難が起きることを認めなければなりませんし、人は極めて適切に決断しました。それ故に議論しても、意見を変えることは決してありません。当時、この種の容易さも困難も、私の前では空虚な響きのようには生まれませんでした。私は延期することが正しいと知る由もなく、延期していました。思考する

勇気は先ず、その空虚の中で吊るされていることからやって来るのです。人は最も立派な決断を選択します。あらゆる反省は悔恨を伴います。しかし人は誓いました。誓わなかった者は、思考する術を知りません。これらのことは空気と同じで、私には大切に感覚的なものでした。そして私は恐れませんでした。反対に、その堅固さが貴重な抵抗と共にそこに見出されるのである、と今の私ならその様に理解しています。何時も読めない政治的纏れを解くためにはそれ以来、私は時間をかけなければなりませんでした。

雄弁の次は出版です。急進派の新聞が創刊されましたが、直ぐに資金不足になり、編集者もいなくなりました。しかしながら、その新聞がなくなったのは私が町を去ってからでした。私も少しは支援したと言えます。私はそこで直ぐに主要執筆者になって行きました。編集長はカフェの常連でした。次第に彼は自分の怠惰を嘆き、変わらない感謝の気持ちを誓いました。けれども彼は私に良い忠告をしてくれました。彼と別れる時、彼は言いました、「あなたはもっと沢山の新聞に寄稿することになるでしょう。でもねえ、私の言うことを信じなさい。新聞をやってはいけないよ」。

私はそこで夜を過ごし、屢々朝を迎えたことも事実です。日常の仕事は、一人の専門家によって行われていました。しかし、私は真剣さと輝かしいことを望んでいました。ところが直ぐさま多くのびっくりする程の困難がありました。それは報道記事を書いて皆から賛同されていた時ですが、実際に当たり前の平凡な記事だったのです。私はそのことを良く理解していました。その時に登場したアランのデビューは、余り面白くありませんでした。アランは教授として書きました。この病んだ文体はルアンまで続きました。しかし、私は書かねばなりませんでした。勿論、何時も抹消線を入れて修正したりしないで書きましたが、文学的野心というものは永久に回復されないやり方でした。でも、如何なる職業にも修行期間は必要なのです。

その間に私は、色々な出来事の記事を書くことになっていた少年に、助言を与える機会を持ちました。私は彼に、火事、国の祝祭、著名人の葬儀、進水式をどのように記事にするのかを教えました。しかし彼は殆ど進歩しませんでした。そして重要な記事の時は、私自身が急いでその記事を書く仕事を行いました。署名は入れませんでした。文体など消え失せろ。しかしここで即興的に書く文体そのものが、自然と発揮されたのです。私が成功を知ったのはその時です。というのも編集デスクとは、署名無しのこれらの記事を写し、読んだものが最高のもののお手本として学んでいる実践者のことであつた、と彼が言っているのを私は知ったからです。私は、この突き棒で跳ぶように仕事をしました。話を戻します。私は雄弁の秘密を探しました。私は民衆と共に走りました。騒音と動きを模倣しました。そして殆ど自分でも満足するまでになりました。これらの仕事は深く隠されていたことを人は理解しています。私が今でも持っている三冊のノートのうち、最初のものを買ったのはその時です。それで私は屢々明確でない儘、時には私を育てながら、自然であるように学びながら、突然の靈感を窺いながら、そしてそれを見詰めながら毎日自分を鍛えました。私はその頃に、書くことの幸せを知りました。そして、この仕事は『プロボ』まで続けられました。次には何らかの恍惚感と共に、この種の教訓をスタンダードに見出しましたが、それは彼がもっと遅くに知ったと告白していることでした。「毎日書くことである。天才であろうとなかろうと」。この考えに従って私は、もしもロリアンの急進派の新聞が新聞小説を必要としていたなら、私は恐らく十かそれ以上の失敗作を書いた後で、小説を創ることを覚え

ただろうと思います。

話すことや書くことのこれら全ての訓練の中で、私は干し草を引き寄せる馬のように、観念を引き寄せました。しかしながら、一つの秩序、諸原則、経験の最終的な鍵を発見しなければなりませんでした。私は長い間、モンテスキューのやり方を実践していましたが、彼は私を大地に結びつけなければなりませんでした。私が公立図書館で『学問として観た歴史』の表題を持つラコンブの作品を発見したのはロリアンにおいてです。本当にそれは社会学の大変に良い教科書でしたし、それ故にこの世の政治学には大変に良い教科書でした。しかし、ルソーは常に私の先生でした。言うならば私はルソーを全ての意味において読みました。そして昨日も『告白』に私が考えたと思っていた一つの観念を見出しました。サン・ピエール神父の瞑想にかかわる処です。ルソーは言っています、「この稀有な人物は、彼の世紀と種族の名誉であり、人類が存在してから理性による情熱しか持っていないで、他の情熱はない恐らく唯一の人物であり、あるが儘に存在し、そして存在し続けることを理解する代わりに、人々を彼に似るようにしたために、あらゆる体系の中で誤りから誤りへ歩かせるしかなかったのである」。これらの行を写し取りながら私は、今までこれ程良く同じ事柄を何回も読み直す必要があるものとして理解したことはありませんでした。何故なら恐らく、私には極めて確かだと思える観念でも読者は認めないと思うからです。その観念とは、人間の構造は政治というものを支配し、その構造は変わらなかったし、これからも決して変わらないということです。この観念は全ての、あるいは殆どの私の友人たちを深く悲しくさせました。彼らは進歩を信じているのです。彼らが努力するのは進歩のためです。私のように考えるのは、私独りです。あるいは殆ど私独りで、あるいは政党の中で、私たちは同じ困難な点に何時も再降下するのである、と私は理解しますし言いもします。例えば、暴君からあらゆる利益を取り上げるために平和を望むことです。けれども自由のためには戦うことです。全てを検討した結果、入口は決して無いと私は信じます。これらの敵対する観念と和解して、それらと共に生きなければなりません。それは忍耐する行為であり、何時も繰り返されます。それ故に私は何時も自分を急進派と言っているのであり、決して社会主義者と言っておりません。

話をルソーに戻します。私が如何にルソーを理解していたのかを、多分人は言い当てます。私は決してルソーを夢想家として理解していたのではなく、寧ろ共通経験に絶えず同意する現実的な精神の人として理解しました。ルソーを全く反対に、取分け彼の非社交的な情熱によって屢々判断されているのを私は知っていますが、私としては大変現実的な迫害によってそれは十分説明出来ることです。スイスのモティエの石は夢想ではありません。結局のところ私はこの人間が好きであり、殆どプラトンと同じ位に信頼しています。

この稀有な洞察力と力強い精神は、世界を動揺させざるを得ませんでした。何故なら、持続的なゆっくりとした彼の注意力を向ける処は何処でも、その攻撃が直接的であるからです。しかし私は更に言うのですが、この作家の中にある創造性は数世紀を培うのに必要なものを持っていると私は言います。『エミール』の中のサヴォワ助任司祭の有名な「信仰告白」を良く読む人々は二つのことを見出すことでしょう。第一に、判断力の分析による魂の証明です。私は要約して証明と言いますが、それは純粋な物質は知覚さえも十分ではないということを理解させる一種の熟考された経験です。ここで自分自身を発見する自由な精神は、自分自身を抑制しなければなりま

せんし、騙してはなりません。それは既に半分カントです。その次に、十分に認識して他の半分を示すことですが、それでも把握するのは困難ですし、それは絶対に間違いのない無謬の意識という理念です。私は繰り返して言いますが、騙したくない者は（そこで人は何をを得るのでしょうか）、ここで二つの重大な衝撃を受けます。簡単に言うなら、魂と神は私たちと結びついているのであり、否定する慎重さ（殊の外、私は良く理解していることですが）では十分ではないのです。この考えは重要ですし、（敢えて言うなら）私にはそれをすっかり全てを説明する能力があると感じています。相次いで接触することでそこに至るでしょう。そして『神々』のような作品は、その先駆けとして大きな必要があることを私は認めます。

そこから私は政治へ行きます。素っ裸の人間を裁こうとするや否や、人は直ちにそこに投げ込まれます。それ故に迫害が不幸なジャン＝ジャックに付きまといました。彼は悪の源泉にいます。彼のように疑問を思考するなら、人はキリスト教徒にも、あるいはカトリック教徒にも、そして王党派にさえ十分なり得るでしょうが、根底ではジャコバン派なのです。しかし、司祭たちへの攻撃は最悪ではありませんでした。『社会契約論』は『エミール』よりも恐ろしくない訳ではありませんでした。彼は、習慣から生まれる単純なもので、レスが『回想録』の中でも言っていますが、決して検証に委ねる必要がないものである服従を問題にしていました。全てはタイトルが「最強の者の権利」の章で更に述べられています。プラトン以後に人が同様なことを読んだものは何も無い、と私は言います。幸いにも尊厳を望むことは、権力の名を誇ります。この言葉は茫然とさせますが、理解出来ます。権力に対して何をするのでしょうか。憤慨することでしょうか。でも、それは空しいことです。気が滅入ります。人は検証の始まりというものを自分自身の中に留めて置くことの方を好みます。その時、もしも隣人が検証していると、人は憤慨します。ここにあらゆる人間における思考の最初の効果である、この種の熱狂の一例が見出されることでしょうか。そして確かに人生が、少なくともほどほどの時に反乱に踏み出すことは、楽しいことではありません。いずれにせよ、それは力で力を変えることではないのでしょうか。言い換えれば、力のよってしか勝つことが出来ないのでしょうか。しかも絶えず勝たなければなりません。最も強い者は、勝利の果実を全て直ぐに失うことなくしては、絶えず最も強い者でいることが出来ないのです。決して暴力が終わることはなく、空しくも勝利に捧げた平和のための何らかの方式を探し求めた過去の歴史が書いてあるのはその様なものです。そして敗者になりそうになるや否や、彼が自分の誓約を踏みつける事実にびっくりする多くの人々を私たちは見えています。それは敗者が約束によって、実力以上のことを認めるしかなかったということです。勝利は事実を過ぎません。事実とは別の事実で壊されます。それ故に戦争によって、平和を手に入れることは出来ません。そして同じことは、国家の内部生活にも指摘されるべきです。権力は時々納得させたいように見えます。しかし、それは力による一つの方法でしかないのを強く認めさせています。抵抗すると、強制が行われます。それは直ちに極めて残酷になります。軍人の権力も、ありの儘の力に基づいて築かれた政治的権力と同じ形をしています。約束が守られる場合を見届けたいと思っても無駄なことです。ロシアが和平を行おうとした時に、フランスで戦っていたロシア人たちに対して起こった思いがけない状況が出て来ます。その様な場合には、権力が譲歩することもあり得ますが、それは権力そのものに影響されるのです。権力は決して譲歩しないと言えます。そして、もしも真剣に部下が意見を言おうとしても、暴力だけが返って来ます。それは、あら

ゆる時代がそうであるように、今でも実際に経験することであり、迅速に直ぐさま経験します。そして、市民の権力も迅速に税を要求し、裁判官も単純な被疑者である人物を迅速に確保するので、それらの権力はそれ故に人がそれらに対して許されていること全てを行えるのが事実として生じます。そして人は自分の生命を危険に晒すなら、常に殺したいと思うことが出来る如く、あらゆる形式に基づいても、反抗というものは王位篡奪そのものと同じ様に正当になるのです。

私が引用したルソーの有名な章を参照するなら、ルソーは別な風に独特なやり方でそれらのことを言っているのを考えてみましょう。私は、彼の思想を少しも強制していないことが分かると思います。しかし、その点は更に議論する問題でもありません。私は自由な注釈によって、実際に読んで貰えるなら、この恐るべき章の読者が際限の無い熟考へ導く一つの観念を、少なくとも与えたいのです。大事な処（それは悪い処）で眼を閉じる人々も私は理解しています。その人は一目観て、その様な思考が導かれる結論を、大変上手に予見する術を知っているのに私は気付きました。それ故に用心して理解する前に、良く戦うことが分かります。そこから納得させることが非常に難しくなって来ます。それは人間が動物であることと全く違います。反対に、僅かな真理が導く処を直ぐに理解するのは、動物ではないからです。

私としては恐れることなく、まさに反抗の道であるこの道に這入りました。そしてそこに、私はジャン＝ジャックの思想を私のやり方で迎える必要がありました。優れた力に屈するのは違う力である、義務を持つことになる〈共和国〉の思想に最後には到達する必要がありました。その様なことは、『社会契約論』によって提示された問題です。でも、この本の表題は、人が時々信じている振りをするように、社会の起源についての研究を少しも示していません。そうです、もっと重大なことを沢山示しています。合法を前提とした社会の資格を表すことが重要です。つまりそれは、社会の構成員の自主的な服従を当てにする権利を持った者です。ところで契約というものは自主的で自由なものです。つまり平等な者同士で行われるのであり、契約は決して市民と権力者たちの間にはありません。そして権力は一時的なもので、それなりの方法で取り消し得るものでなければならぬと直ぐに気付きます。契約は市民と、あらゆる者と約束する各人が、全ての交換の保証を受入れる対等の者との間で行われるものでしかありません。この状況においては誰にも服従はなく、命令もありません。一人ひとりが主権者であり、同時に臣下です。主権者としての彼が、臣下として服従しななければならないことを固く宣誓するようなものです。立ち上がって討議する国民として奇妙なこの状況は、極めて少数民族の国民を除いて、最悪の場合は決して作られません。しかしながら国民は、殆ど一瞬ごとに自分自身から自分自身へのこの宣言を更新する限りにおいてのみ国民なのです。いずれにせよ最早権力は行使されず、全てが問題にされる一瞬がなければなりません。それに従って選挙が一般的になるのは当然のことです。その選挙から除かれる者は、権利も義務も持たないお金で雇われた傭兵です。実際に、あらゆる国にいる外国人のように、傭兵は社会契約の枠外にいるからです。市民として結果が一つになる時に、皆の意志も満場一致を前提としていることを人々は十分に気付いていました。この困難に私は長く悩みませんでした。何故なら全ての状況が困難で、全ての結論が一時的であるのは明白であるからです。そして法律を制定する多数派は、裁判官の判決と同じ様に折衷案の平均的なものになり、彼らも又、絶対に間違いがない訳ではないのです。しかし、やっかいな問題で多数派に従

う決心をすること、あるいはもっと正確に言うなら多数派に従おうとする決心が満場一致で選ばれることも、やはり明白であると私は思います。そうでないと投票を行うのに何の意味もなくなります。従ってもしも大多数の人が、自分の考えに反することが決まっても従わない決心をして投票へ行く者は、社会契約の枠外に自らを置きます。代表者によって決められたことに従う決心をすること、軍隊の司令官に従う決心、裁判官の判決は正しく公正であると認めようとする決心についても同様に注目して下さい。

この問題を他の側面からも、もう一度考察するなら、法律とは決して最大多数者によって少数者に押しつけられた従属ではなく、全ての人々に等しく押しつけられた従属であることを（もしもその法律が本当の法律ならば）、従って本当の法律は総意から非常にかけ離れていることはあり得ないことを、私は他の人々や私自身にも示そうと努めます。兵役は全体にとっての義務であり、教育も衛生も同じです。多数者がその様に決定したことは、悪いものであり得ないのを証明しています。もしも悪いものであったなら、多数者がその悪を受けるので、悪に気付かないことは本当らしくなく、あり得ないことなのです。そして人がもう一人の暴君と見たがる最大多数者は、虚構でしかないことにも注目しなければなりません。多数者は問題によって、信じられない位に多くが移動します。この動きによって望ましい満場一致へ接近するのは分かりませんが、奴隷化と反乱からは解放されることが取分け重要なことです。私が見る処、正当な権限を求め始めるや否や、これらの原則が真実であるのは明らかです。そして、もしもこれらの原則に従って歴史を考察したかったなら、国の内部的平和は変な法律に不平を言ったり変えたりする権利を少しも損なうことなく、一定の満場一致によって何時も落ち着いて終わったことに人は気付きます。そして現実の社会というものは、習慣と同意の混合であることが何時も見出されます。例えば民主国家の我が国においては、多くの民法は習慣に基づいており、全ての刑法は同意に基づいております。犯罪者たちは特殊な一つの場合を除いて、殆ど何時も同意している者たちです。それは裁判に係わる問題です。そして絶対に同意しない者たちはその時、自分自身だけの意志に基づいているのであり、社会から排除され、法律からさえも排除されているのです。

法律から排除されているとは、どういうことでしょうか。それはそんなにも単純ではありません。絶対的に何時か人を排除しても利益はありません。法律は全ての人に公に適用される必要があります。そして純粋な反抗は虚構でしかないともう一度言わなければなりません。その代わりに純粋な反抗は、各人において一瞬のことであり、もう一度その契約は締結されなければならないこと、更にもう一度自由にならなければならないことを意味しています。この種の考察に従って、市民や党派の活動を観察する人は、実際の自由が政治団体の中で如何に流通するのかを理解し、そしてその自由が反目を超えて満場一致でついに愛されるようになるのを私は信じています。しかし、それは各人の奥底にあるものであり、目的になるものでもあります。そして結局、一時的に条件付きで任命された部下に過ぎない裁判官や連隊長たちを決して陶醉させないように、思い上がったことを言わないようにすることも、各人には自由になることなのです。この政治的駆引きは、私には決して詰まらないものに思えませんでした。私は困難を見ましたし、今も見ているからです。常に悪用される恐れがある権力に対峙しなければならない慎重さを見ましたし、今も見ているからです。そこから今日でも新鮮で未来性のある相当の観念が結果として生じます。例えば、政府への質問と言われる議会運営は、公の通知書としてだんだんと定着して行

くでしょうし、同様の公開性以外で承認されることはなく、それは世論や、世論の精神である一般的意志と私が言ったものに従うことで何時も十分なのです。その代わりに、もしも人が所謂権力を倒すのに慣れたなら、権力を倒さない限り信頼していることになります。そして圧制の慣れがそこから生じて来ます。単純に政府は世論に従わなければならない、と私は言い続けますが、それは気紛れであってはなりません。それは常に行うことです。それ故に、それは世論が如何に最も良く、そして最も自由に示されるかを探求するための主要な問題です。いずれにせよ、各人の中の臣下と主権者の対立は、私たちの秘密の活動を大変に良く報告しています。臣下として人は抵抗し抗議します。そして内心では君主として同意します。しかし、それに倣って偽りの騒がしい世論の外見も覚悟しなければなりません。

私が新しく結論を導いた熟考されたテキストはその様なもので、ある人々はそれを認め始めています。例えば、私は常に比例代表制に反対して来ましたが、それは党派という組織によって圧制を加える権利を持ち、権力の追求しか心の底にはないからです。選挙での投票は、（裁判官のように）決定するための折衷方法でしかないのですから（満場一致の世論に従うもの）、まして宣誓した党派によって実際に決定する最大多数の人々を固定させるものではなく、この種の決定を観念の中で強くすることと原則として一致しないのです。その上、全ての野心家は比例代表制に賛成していますが、それは実際に幾つもの共和国を滅ぼしました。

もしも私がこの展開を正しく導いたとするなら、それは開かれた儘にして置きます。政治的賢明さの全ては閉じないことにあります。『社会契約論』の思想は、服従と同じに反抗の正しさをここに教える唯一適切なものであると私は信じます。この話は際限が無いでしょう。私は政治的問題と如何に取り組んだかを只説明したかっただけです。（完）

## 七 抽象的思索

一九〇〇年まで続いたロリアンでの七年間は、つまり私が三十二歳になった時まで、無駄な時間を無視するなら、全体としては一つのものに集中しないで色々な学習に多忙でした。それは屢々、事件とか出会った本に因るのですが、私に姿を見せる愚かさを私自身で乗り越えることを何時も目的としていました。数学においては、定数から変数への移行を何時も何回も繰り返したり、最大とか最小を求めるための方法として微分係数へ辿り着いたりして、これらの不可思議な特性を理解しようと試みましたが、大して進歩しませんでした。これらの公式を要約のように利用していた実践家たちにも、私は大して感嘆しませんでした。彼らは職人の見習いに過ぎなかったことを、私は良く知っていました。しかしその時から、数学から解放されていた「形而上学雑誌」によって、この学問の創造者たちは、困難は少なくとも表さない広大な展望を持っていたことを私は知りました。私は、たどたどしく読む生徒のようでしたし、人が流暢に読むのを見ていました。私には野心がありましたが、人が時々想像していたような権威ある仕事ではありませんでした。既に言いましたが、私は最初の衝動を抑制しなければなりませんでした。短時間しか熱中して勉強しませんでした。要するに、数学は殆ど進歩しませんでしたし、何時もそんな調子でした。この問題に関しては良い先生がいて、生徒が勉強すれば多くのことが身に付くことを私に理解させてくれました。率直に直ぐさま私の限界を言っても、対数を正しく理解して利用し暗算して、導関数についてのラグランジュ（1）の論文を申し分なく読む処まででした。私はこの知識を殆ど用いませんでした。私は、数学が花火を上げるように華々しい時代に生きていました。そして最悪だったのは、私の小さな建造物に数学が横柄に這入り込んで来て、私の仕事に氾濫していたことです。その詳細は、今では勉強になります。私がこの種の研究に投げ込まれたのは如何なる偶然によっているか、人はお分かり頂けるでしょう。その研究には長い時間をかけましたが、たどたどしく読むこと以外は、何も覚えませんでした。

「形而上学雑誌」は、私がパリから地方へ出発した頃に創刊されました。一九〇四年頃まで私は、きちんきちんと定期的に原稿を送っていました。その雑誌を受け取って読んでいました。私にもその力がありました。ところがロリアンで、実際家よりも良くなるろうとしていた優れた数学者に出会いました。彼は、話すことや議論することが好きでした。彼の主張は、最も抽象的な数学も経験を根拠にしているということに帰していました。そして、例を出してそのことを証明して喜んでいました。最悪の場合には、掛け算の積を変えずに二つの因数の順番を変えられることを証明するまでには至らない、と彼は言っていました。しかし、点とか多くの事物は配列に従って、あるが儘に存在していることが分かります。単位を水平に数えることが出来ますし、列を垂直に数えることも出来ます。あるいはその反対にすることも出来ます。数えるという方法は数えられた事物に触れることさえもしないので、数字は常に同一であるのは明白です。そこからレザンも自分の著作『数学入門』において同じ見方で展開していた教育法についての結論が生まれます。でも、この方法は本当に数えていなかったように見えました。私が言っている一八九四年か九五年頃の時代には、これらの指摘は私にとって新しいものでした。私はカントに初めて接し

ていたので、数学的経験が通常経験であると決定したり、問題の中の定理が経験に基づいて発見された自然法則であると決定したりする気にさせられるようなことはなかったのですけれども、それでも私は友人Bによる経験論者の主張には良く行きそうでした。要するに、何らかの議論の上で目覚めているのは悪くないと思っていました。従って論文がBによって書かれ、私によって発送されていました。この無垢な行動は、哲学愛好家たちの頭上で今でも続いている抽象的な一種の爆発を引き起こしました。ヨーロッパの奥地から暴風雨がやって来て、「形而上学雑誌」は蹴かされた儘でした。最初に起こったのは有名なアンリ・ポワンカレの電撃的な反論です。その結果彼は、私の友人Bがその問題を認識しているのは僅かだったことを明らかにしました。「形而上学雑誌」の読者にとっては、単純から出発して段階的に導いて行く透明で骨の折れる証明がその時展開されました。それは教養ある人々の間では有名になっていた方法である、ポワンカレが数学的帰納法と呼んでいたものを明示するのに役立ちました。更に、もっと驚嘆すべき離れ業がそれに続きました。数学者たちはその時、冷静に明晰さを広めて、私たちの苦い経験によって結合の精神を発揮していました。私にとっては既に困難であったそれらの仕事は、純粋な意味でこの世のものでなくなっていました。つまり純粋理論に従って次々に展開された恣意的な定義として表示されました。その記号論理学は何かに接木されました。あるいは更にもっと困難な哲学的代数学が次々に何かに接木されましたが、結局私は利益が乏しいと分かりました。その代わりに数学者たちは物理学の王様になりましたし、今でもそうです。それ故に哲学者たちは最早、これらの大きな秘密を何とか骨を折って学ばなければならなかったことが証明されました。もしも哲学者たちがその悪口を言ったなら、注意して下さい。それに屈した人々を私は知りました。諂った人々も知りました。そんなことは私の気に入りませんでした。私は、加速度運動と解析幾何学の基礎を再び勉強し始めました。私の勉強の速度では、例えば新哲学を行うには遙かに遠い処におりました。私の決まりは、知ったことしか話さないことでした。私は、それを忘れなかった人が判断することに期待しています。

実を言えば丁度その頃の私は、まるで私の追従者たちを疲れさせたかったかの如く、別の方面へ逃れていました。「形而上学雑誌」にクリトンの名前で公表していた対話篇のことをここでお話し致します。それはまさしく上手に表した謎へ赴くのに成功した部類に入るものでした。その着想はアリストテレスのものでしたが、多分想像したアリストテレスのものでした。回転する神である彼の物理学を私は単なる一段階として考察していました。そして、全く正しい認識における行為を言う限り、運動は行為の力による移行であると私は何らかの意味で理解しようと試みました。そこから私の助けになったことは、デカルトの物理学で発見したことと関係のある運動の概念でした。そこから運動は、あるが儘を与えられた事物ではなく、それ故に存在の一部でもなく、寧ろ形式上の要素であり、思考の創造であることがその結果明らかになりました。この考察から私はゼノンの有名な論証を「形而上学雑誌」によって再び説明し解決して乗り越えました。何故なら私が理解する限り、運動は分割出来ないからです。哲学者ジュール・ラシュリエが「部分に先行して与えられた全体」と空間のことを書いたように、それは正しかったのです。私はもっと正確に言うことも期待しました。というのも形式は決して与えられないからです。し

かし、それらの帰結に驚嘆して下さい。運動はそれ故に開始の前に終了させられています。これらのパラドックスには、思考と対象を混同させなかったと証明されれば、一つの意味があります。そして私はそれ以来、同一の思想をずっと継続して行きました。何故なら思考は、終了することで始まることを何時も言って理解しなければならないからです。しかしこれらの修練の中で私を驚かせたのは、J・ラシュリエが言ったように「飲むための大海は僅かである」。いずれにせよ、私は一口で大海を飲んだのです。そして最初の対話篇で人も気付くことが出来るように、私は神も全てのものも一緒に飲んだのです。私は、形式と内容を混同しているもの全てを元に戻して、この種の企てを全て一度にカントが如何に批判したかをより良く理解したのに応じて、この姿勢を維持出来なくなりました。要するに私の始まりは、始まりに過ぎませんでした。始まりそのものだったのです。哲学というものは、先ずはこの純真さによって純真になるのであり、そして嘗ての私がそうであったように微妙で大胆なものです。私はこれらの対話篇を決して否認しません。多くのことをそこで掴みました。

私は今、急いで自分から離れようとしています。私は大変に急いで行きます。私たちは今、十字路にいます。数学者たちはカントを読んでいなかったことを、私は良く理解しました。しかし何人かはカントを読んでも、十分に理解していないことにも私は気付いていました。単純な例によって私は少なくともその困難を見せたいと思います。星には数があるのでしょうか。勿論あります。それでは偶数です、あるいは奇数です、等々。もしも私が言えるとするなら、あらゆる種類の永遠に至るのを人は理解します。しかし、どうぞその数に注意して下さい。もしもその数が事物として与えられているとするなら、その時はそうです、無限の数になりますし、数は決してないと言わなければなりません。そうして数をもっと良く考えてみるなら、それらの数の単位の結合は形式によるもので、思考する者の意思が決定しているものであるのが分かります。彼はこの結合を選択するのであり、私が言う別の例においても、その不動の軸と運動を選択するのです。しかし選択されたこの運動も、選択された数を数える方法もなく、所謂存在するものになり得ません。それらは思考による秩序であって、世界にとっての危険もなく創ったり消したりします。それ故に、さようならです。読者よ、もしもあなたが良く理解したなら、事物の対象による形而上学にさようならです。最早、精神による形而上学しか可能ではありません。そして後者の形而上学からは逃れられないことも本当です。結局のところ今後は、一種の宗教は言い尽くされて、畑にも森にも最早神々はいなくなります。それらの神々の上には、如何なる王もいなくなります。この種の考察を私は、遠くの結論まで私の前を絶えず押し進めて行きました。しかしながらその様に考えながらも、もしも口で言うことを何時も自覚することは危険な賭を行っていたことであったとするなら、沢山の困難を何時も克服することになりますが、それが真実であり正しいことと私は信じます。

この数年の間に、授業はどうなったのでしょうか。私は仕事を覚えたように思います。つまり世間一般の決まり文句や通常の意味についてすっかり身に付けながら、少しずつ野心から癒えて来ました。私は何時も、哲学の専門用語を避けようと心に誓っていました。でも未だ十分ではありませんでしたし、皆が遣う言葉を遣いながら、極めて曖昧である得ることを試していま

した。最も崇高な観念でさえも決して捏造するものでなく、使用することで当てられた語彙の中に含まれていることを私が理解し始めたのはその時です。それにつけ加えて、決まり文句には全て真実があり、それを再度取り上げて、再度理解すれば良いと気付きました。従って私は生徒たちに、彼らが認めるようになった本当の思考を行うようにしなければなりませんでした。私が求めたこの指導方法は、私も十分承知していたように、困難な仕事を余儀なくさせました。その代わりにその方法は、私に展望を開かせてくれました。もしも人が言っていることが全て真実であるなら、もしも人生をそこに委ねることしか必要がないなら、全ての宗教が真実であるのは明白です。しかしこの考えは、理解して貰うのは困難でした。取分け、新しく思考し、そして先ずは全て拒否する意図というものを持っている哲学を職業にしている者たちには困難なことでした。いずれにせよ私はその様にして生徒たちに尽くしました。彼らは新しい世界へ到達すると信じていましたが、反対に一般的表現による、限りなく豊かなものも発見しました。その時、私は何か美しい様式に気付いて彼らに理解させたのです。私はそれで深遠な内容のものを出版させることなしでは済ませなかった、と言っても人は十分信じてくれるでしょう。それらは遺産と同じです。そして、この世で最も困難なことは、考えながら言うことですが、皆は考えないで言っています。一つの例で十分でしょう。職人たちは、心理的意識と道徳的意識を区別します。何についても心理的言葉は決して遺産になりません。それを一杯抱え込んでも、極めて無益であることに私は先ず気付きました。しかしそれとは別に気付いたことは、私をもっと遠くへ導くようになりましたが、それは作家と同じ様に大衆も、決して道徳的意識を言う習慣がないということです。彼らは意識とか良心と言いますし、それで全てが言われているのです。それ故に私はこの美しい節制を準備するようになりしました。そこに先ず、輝かしい観念を見出し、次に大きな進展を見出しました。何故なら意識とか良心というものは、常に存在しなければならないものを存在するものと対立しているので、それらは道徳的秩序のものであるからです。そして全く単純な知覚においてさえも、習慣から私たちを目覚めさせるものは何時も一種の躓きであり、単純な事実への力強い抵抗です。その様にして私が気付いた認識というものは、思考する名誉と同一の名において、憤慨した拒絶によって始まり、そして継続します。何故なら、その意識は自我と自我との分離を仮定しており、それと同時に不十分に判断されているものも奪回するのですが、救われなければならないのを仮定しているからです。従って、知覚による全ての外見は否定され保存されます。そして人が目覚めているのは、この内部の対立によります。そこから全ての日常から私が引き出したことは、人間としての使命という高い観念や規範に従って姿勢を正すことがなければ、人間は犬や蠅よりも意識がある訳ではないということです。ここにデカルトの動物機械が非難されたのと同様の異議が群となって蠅のように湧き上がります。そして、その意識による英雄的な概念が、下位でふらふらして分離された意識として受け取られる無意識による不可能事と結びついていることを、読者は多分見抜くことでしょう。非常に大きな発見は、決して一日で成し遂げられるものではありません。私は、困難解決の手懸かりとなるアリアドネの糸のように(2)、日常の言葉、神聖な言葉、美しい言葉を用いて来ました。その結果、私は思想家よりも寧ろ修辞家として判断されるようになりましたが、私が話しているのは思想の商人たちのことです。何故

なら、民衆は意見を述べる時が来れば、一時も間違えなかったからです。

本当のことを言うなら私は、あらゆる理性ある言葉としての意味で、人間の存在理由、〈人間性〉そのものの思想を、大変な苦勞をして触れたのです。その後、私は想像もしなかった力強さと輝きを持って提示された人間の言葉そのものと言える思想をオーギュスト・コントに発見しました。というのも注目するに相応しいことは、職業によってそうならなければならない者たちの中で、少なくともコントを読んだ者がコントを語るのは誰もいないからです。私はここで批評に触れますが、度を越すことはありません。大雑把に言います。困難なことですが、あるが儘の偉大な哲学者を理解する真の哲学の傍には、例外なく全ての私たちの先人たちの冷酷な批判によれば、絶えず廢墟に身を立てる外見だけの哲学を、恐らく如何なる時代でもそうであるように、現代に建てて発展させているのです。そして、このことが大いに習慣となって過ぎて行くので、ヘーゲルを理解してヘーゲルに道理があるとするに（何という美しい表現でしょう）一所懸命になっている青年は、テキストの前で動かない儘になっているのを批判されました。「何時も何らかの保留がなければならない。少なくとも批評の一言がなければならない」と今日、最も優れた思想の指導者たちに教えられている一人が言っています。しかし、この領域で最も優れた人は、既に何者でもないのです。

私はそれらの気持ちの中で自分を鍛えましたが、全く人には気付かれない儘でした。その頃、「形而上学雑誌」に公表された対話篇やその他の論文の難解さは、私を批判から避難させてくれました。私はわざとそれを行ったのではありませんが、当時は人を教育することよりも寧ろ感動させることの方が密かに私は気に入っていました。但し、人と競争して心にかけて貰わなければならなかったとは信じないようにして下さい。私は勤める場所へ真っ直ぐに導かれた生涯に、その様な痕跡は少しも見出しませんでした。

そうしている間に、日々は過ぎました。私は心地良いこのロリアンの町に満足して、大事な友人も何人か出来ました。人々はそこに私を放って置きませんでしたし、良くしてくれました。パリの友人たちは、ルアンに空きが出来てくることを教えてくれました。私は、何時も私に好意的だったジュール・ラシュリエに手紙を書かない訳に行きませんでした。私の任命は問題なく行われました。作家としての生活が来る前の最終の町であるロリアン滞在中に、先ず私が思い起こして書いて置かなければならないことは、ラニヨーを亡くしたことです。彼に関して言うなら、私はずっと彼の弟子でしたし、忠実な弟子でした。死の衝撃は、私の先生を広く知らせること、彼の稀有で不可思議な文書を少しは説明すること、ついには彼の有名な授業を幾つか蘇らせること、それらのための一連の仕事に私を投げ入れました。この敬意に満ちた仕事は「形而上学雑誌」から始まり、私がプロポへの探求に惹き付けられながらも、私の顔が赤くならないやり方でその後も続けましたが、更にもっと後になると、尊敬の念から気付かなければならなかった道から非常に遠くなって仕舞いました。私はジャーナリストの生活を送っていましたし、新聞記事を形而上学的水準に高めることをしていました。現在もこの仕事に自分を捧げていますが、障害や危険が一杯で、ラニヨーなら間違いなく反対するでしょう。私は自らの本質に従ったこと、下らないことも真面目なことも区別しないで同じように高めたことを心に言うことが出来るように思えます。

私の考えでは、この様にして私は作家たちの大家族に入ったのです。彼らは実際に何時もジャンルの混淆に成功しなければならず、そして一方では退屈で難しい観念を、他方では容易なお喋りを身に付けるのを拒否することに成功しなければならなかったのです。自分を隠そうとしてアランという名前を選んだ後に、私に出来た全ての哲学をこの小さな家で少しずつ覆い尽くすようになったのも、この種の心配りからです。しかしながら、そのことはお分かりになるでしょうが、私と同じ位に読者によって少しずつ行われたのです。

(1) ラグランジュ (一七三六～一八一三) は、フランスの数学者であり天文学者。

(2) アリアドネの糸とは、ギリシア神話のクレタ王ミノスの娘で、糸玉を恋したテセウスに渡し、迷宮のミノタウロス退治を助けたところから、困難解決の手懸かりをいう。

## 八 ルアン

ルアンが私の気に入るようになったのは、大きな港の光景、まさしく有名な建造物が幾つかあるからです。そして小丘に登ると直ぐに分かるように、町全体が地理的にも美しいからです。この様に当初は順調でした。ところが不用心に仕事について時、大変に強くあの疲労感が又戻って来て、全てが台無しになって仕舞いました。再び私は死ぬかと思いました。今度は定年まで続けるに違いないと思ったこの状況では、全ての野心を捨てる羽目になりました。というのも私は決して自分の未来を見なかったからです。生徒が多いこと、雑務が無視出来なかったこと、民衆大学の活動、そして結局のところ当時の共和制擁護の時代にあつての政治への幾つもの権利要求によって、私はその機械の中に取り込まれていたのであり、最初に精神の切れ味をすり減らしていたというのが事実です。私は最早、勉強することなど考えませんでした。貯えも使って仕舞いました。私の思考の背後にあるこの種の歩みは、ずっと後になって私に相応しい地位が見付かった時であったパリでの辛い始まりの後になって、やっと停止しました。

ルアンでは人文地理学が、その最も顕著なイマージュによって明らかになっています。労働する町がセーヌ河沿いに広がっているのに、如何にしてルアンでは金利生活者の町は何時も小丘に建てられて高く上がって行くのかが分かります。河の同一の速度の流れが、単に凸面の河岸を削り続け、反対側には水が運んで来た土砂を堆積し続けるばかりでなく、西側の高台の居住区は卓越風によって北側に北東に運ばれて行く煙から逃れているのが全て明瞭に分かります。この他に外見からの貧富の対比は、私が聞いていたように大部分の都市よりもこの町は明瞭です。私が見たものは、余りに良くそのことを物語っていました。丘に刻まれたこれらの全ての段階、全ての相違、旧市街の醜悪な外観は、慈悲の炎を目覚めさせるものになりました。私は、それらの崇高な事例を幾つか見たのです。それらには感嘆しましたが、生き生きとした活動は感じませんでした。その後私は戦争で知ったように、強い情動は私の体の中に広がりません。全く反対で、肉体という鎧はそれ相応の衝撃で固くなるのです。しかしながら、私が最高の経験を持った年金生活や、役人たちの幸せな町にはなかった社会の一つの概念を、私がそこに見たのは間違いありません。当時からルアンの町は、私にとって他とは違う存在で、全く石ころだらけの音が鳴る人間臭い工場が自然な町でした。平原の平穏と何という対比でしょう。そして更に又、常に攪拌されている大西洋の揺れ動く浜辺とも何という対比でしょう。私の先生である大西洋のことを書いたのは、私の精神史の一瞬を披露するだけです。波打ち際には確かな地位が無いことを人は十分に分かっています。本当に何処にも無く、あるが儘です。私の考えではそれが政治の秘訣です。しかし取分けその町は、古くて建築の町であり、確かな地位があると信じられている場所です。これらの両極端の中間にある言葉である田舎は、この対照によって照らされていて明白です。田舎は町との関係から言うと、繁る葉や収穫としての海になりました。それを見付けるのは難しくありませんでした。しかし過去の記憶がない大西洋との対比から言うと、田舎は変わらない道と寺院とによって一種の町でもありました。湾や殆ど島のような半島から遠い大陸になることが出来るものを、私は少し理解しました。そこでは決して思考も活動的な精神も生まれず、寧ろ不動の宗教との自然な仲間である芸術が生まれた、と私は仮定しました。余りに大胆に単純化されたものでしたが、これらの地理学的法則は絶えず私の精神を養い、私が何時も感動していたモンテスキューの方法に沿った地球物理学へ連れ戻してくれました。

以上の話で私が感嘆したことは、モンテスキューの物理学にはまさしくかの有名な〈史的唯物論〉の

素描以上のもの、いや素描さえも認められなかったことです。私はその思想をマルクスにも発見しましたが、明らかにするための事例をそこに余り発見しませんでした。抽象的な観念と或る種の予言として提示する思想家たちの習慣を、私は精神の悪しき教育のせいにしてしまします。マルクスは幾つかの事例しか考えていなかったと私は十分に確信していました。産業生産の彼の全ての分析がそれを十分に証明しています。史的唯物論は、それが全てであるとさえ言えます。しかしながら、彼はそのことをはっきりと言っていない。そして弟子たちもそれらの事例を追って走り回ったのですが、まるでそれらの事例が稀有であったかの如くです。私が何時も行っていたのと逆の方法で、彼らは産業のメカニズムの近くを念入りに追って行くだけでした。彼らは、蒸気機関の発明が思想や道徳や政治や宗教でさえも様々な方法で変えたと気付いたのでしょう。家庭的仕事場と共同の仕事場との関係を比較すれば十分です。この考えを辿って行くと、亜麻糸が機械仕事を使えなくする唯一の原因であることから、亜麻を晒す川が宗教と伝統に縁取られているようなものであると私は理解しました。しかし一人の人間の考えに、職業の影響や痕跡を探し出す術を知らない限り、人は十分に理解していませんでした。馬を御する人間は、車を運転する人間とは同じ思想も情熱も掟も持ちません。馬（シュヴァル）に乗る人間をシュヴァリエ（騎士）と上手く名付けたことも私は理解しました。私はこのこと以外の問題は殆ど扱いませんでした。批判出来るまでは、長く何年も理解するために過ぎなければならぬことを、如何に私が理解したかを人は知っています。そして私たちが忙しくしている場合、十分に理解したならもう批判すべきものは何も無くなるのは明白のようです。読まれる価値のある作家たちも全てそれと同じである、と私は確信しています。しかも何らかの感動が無ければ思想は見出されません。全てが認められて全てが帰着する実際の〈人間性〉に触れるようになります。私が敬虔と呼ぶものは、この長い労働によるものです。私が、イギリス艦隊とヴェニス艦隊の相違は、水質と水の深さによることをモンテスキューから発見した時は何と嬉しかったことでしょうか。そこからは高い船底や大きな帆に殆どが書かれているようなイギリス人の誇りの形が見えますが、この誇りは原因であると同時に結果でもあります。そして、少しも急いだりしないユリシーズの旅行者気分も、地中海を航海することの難しさに起因していると人は理解しないでしょうか。シャートーブリアンは、友人たちを待つことに同じ理由を発見しました。でも、その点について私は終わりには出来ません。私が書いた多くのものは、無尽蔵の観念の言い訳であり、これもその中の一つです。

ルアンから始まったそれらの思考を、私は大変に遠くまで導いて行きました。私のエッセイのノートは、その痕跡を留めていました。しかし、その思考の時間は何も新しいことを教えなくても、人々が兵役につく多くの機会に討論させられました。私がたまに書いたもののように、私の話も同様に抽象的でスコラ学的で形式的でした。大変に人気があって活発だった民衆大学の公開討論も、私は指導することしか向いていませんでした。しかし結局のところ、その時は集会や会話の決まりに我慢しました。私は詭弁家になり、何も教えませんでした。討論する者たちは少なくともお互いに教え合うと言われていますが、私はその様なことは認められませんでした。反対にその時、討論では誰にも教えず、説得する術は何から何まで全てが議論する術と異なっていることを、私はすっかり理解しました。何故なら人は証拠を出しませんし、有力な証拠は尚のこと出さないからです。私はその例を幾つも見ましたが、用心そのものが理由になるとは、未だ完全に理解することはありません。巧妙な人には答えられないということが、何かの証拠になるのでしょうか。元神学生が医者になって或る日、自由を味方にして議論しに来て、勝利を上手に収めようとする唯物論者の小グループに反対します。ところが唯物論者たちは勝てないのです。何が起きたのでしょうか。確かに彼らは、証拠には事欠かない決定論の中で、自分を強固にして行くという方向で思考するようになって行ったのです。この様な難問題の中で一步前進するには

、何年もの沈黙が必要とされるのは確かであったと思いつつ、私は全てを予想出来る立場にいました。私は火に油を注ぐために自分を抑えました。尤も、三百人もの人を集めて理論的思考に興味を持たせることは、何時も詰まらないことではありません。他の議論の時には、私は悪魔の弁護士にもなります。その土地のダーウィン主義者たちを苦しめた思い出もあります。彼らは自然淘汰と血統で素早くすっかり武装して仕舞いました。私は種族の永続性のために頑張り、負けませんでした。このことは大変に洞察力のある公正な審判者である〈数学者〉を大いに驚かせました。もう一度言いますが、それで何の証拠になるのでしょうか。私としては観念を道具としてしか理解しませんでした。経験の対象を掴むための道具を言うのであり、この場合生きている生物の実体を解釈するには、少なくとも二つの鍵があるのを私は発見しました。教義そのものは最も秘められたものの一つであり、私はその栄光をプラトンに捧げます。そして例えば、私が声をより大きくして話した〈史的唯物論〉は、社会の謎を解読するための一つの鍵でしかありません。その代わりに大変に自然な陶酔によって、私たちは同じ仮定であらゆることを説明したいと思いました。ところがそれが行われても同じことです。私が思うに、対象の性格を対象から奪って仕舞います。言い換えれば、科学の本当の目的は多くを説明することよりも寧ろ発見することです。何故ならその対象は強力で恐ろしいものであるからですが、その対象は深く隠されてもいます。古代人たちは重力を知りませんでした。その動きについての観念は欠如していたということです。それでも恐らく、私たちが落下するのと同じ様に、彼らも落下したでしょうし、私たちが小石を投げるように、彼らも投げたでしょう。しかし彼らが重さと命名していたものは少しも重力ではありませんでした。あるが儘の世界や、あるが儘の人間を発見することが重要です。それらの観念は方法でしかありません。そして結局のところその様なものが、観念論への本当の反論になるのです。

私は、ついに政治にはゆっくり時間をかけるようになったのですが、政治のことを話すのはごく僅かにします。選挙運動は出足から悪かったです。私たちの立候補者は誠実な愛すべき人物で、自分の限界を弁えていて、社会主義者たちを満足させることもなければ、ブルジョワたちの票も失う危険がありました。更に悪いことに、知事を自然と信用しない町で、彼はその知事の支持を得ていたのです。私は、選挙活動を指導しなければならない三巨頭の一人でした。従って私は、権力の単純な代理人の一人と見做されて、この屈辱を何度も味わいました。友人たちを掻き立てても誰も味方に付きませんでした。本来の演説を再び行おうとしました。何のための交渉だろう。何という忍耐だろう。社会主義者たちは何度私たちに軽蔑の声を浴びせたことでしょうか。私たちの味方であることを、何度疑わなければならなかったことでしょうか。私は慇懃に聞いて、私の結論は決して変えないことを覚えました。それ以上に力を入れたことは、直ぐに廃刊になりましたが小新聞でした。新聞の名前は忘れましたが、非常に楽しかったです。仕事は上出来でした。というのも敵は、私たちの新聞を束で買い占めた程であったからです。結局私たちは敗れました。そして私は、行政や密告者や警察が不実であるのを知りながら、極めて自然に運用しているのを学んで、疲れ果てて仕舞いました。しかし献身的に尽くす人々と知り合いになる機会もありました。彼らは主義を貫くために仕事に打ち込み、そして純粋な愛から行っていることを私は知っています。希望と信念に溢れたこれらの人々を忘れて見捨てたりすることが、どうして出来るのでしょうか。決して出来ませんし、これからも出来ないでしょう。経験は何時も苦く、兜の上を水が流れるように、私の上を流れて行きました。総じて何時もあらゆる人に背くのが知性の方針と言えるのかもしれないけれど、私は変わることなく同じでいることが大変に幸福であり、誇り高かったのです。忠実な精神の光である、と私は良く言っていました。そのことを私は言っているのです。出来事後で思想が変わるなら、知性は最早一人の娘でしかありません。私は少なくとも礼儀正しさを要求する風潮のある一つの運動の中で、パリへ赴くことになりました。この様な思想の風潮に、私は決して屈しま

せんでした。私は力一杯抵抗しましたし、決して同盟を結びませんでした。それが最良です。人は恐らく大いに退屈したと思うかもしれませんが、決してそんなことはありません。私には暗い想像力が無いのは本当です。全く反対で、最悪の場合でも、戦争の時でさえ、私は何時も生活そのものによって人生を魅力あるものを感じていましたし、不都合を越えていると感じていました。（完）

## 九 パリ

パリでは、私は政治を気かけなくなりました。それは反響が、人間よりも強力な石ばかりの建物で出来たこの大きな谷では避けられない結果です。でも、民衆大学の仕事はその儘続けましたが、モンマルトルであつたりゴブラン工場であつたりしました。しかし、殆ど善良な市民たちしかおりませんでしたし、時折り政治家の某首領が私たちの理屈を嘲笑していました。あとは商店の従業員が二、三人と、工場労働者も二、三人おりました。確かに注目すべき人々でしたが、やはり少し味気ない講義の連続で、ついて行くことは出来ませんでした。私は何の業績もありませんが、幾何学と天文学もやろうとしました。でも、物理学に落ち着きました。実際に私が教えたのは、必要な実験をとことん熟して、全く厳密なものである電流でした。私を手助けしながら、全講義を受講し続けた嘗ての生徒たちに聞いて貰えば分かります。工場労働者は一人しか残りませんでした。私が思うに、小学校では理解力の勉強という観念さえも、子供たちに与えるのを用心しているのです。小学校での科学は、好奇心と遊びに止まっているのです。それではまるで直流や磁石や誘導電流の辺りを勉強するのではなくて、多くの火花を使って最新機械を私が操作させていたようなものです。そんなことでは絶対に駄目です。多分、間違つた観念を与えて仕舞います。勿論、小学校とかりセ以外では効果的な教育が行われていないことも十分にあり得ます。何故なら生徒たちは、出席して聴くことが強制されているからです。その時生徒たちは、厳しい理解力を味方にするのです。先生は、気に入られようと一生懸命であり最早、手品のタンブラーを操る手品師でしかありません。

私は、まさしく気に入られなければなりませんでした。今風のリセにいました。でも、気に入られることは何もありませんでしたし、名門の子供たちの可愛い軽薄さに我慢がなりませんでした。全ては順調でした。五十人以上の未熟な数学者たちを前に行つた特別授業の時も大丈夫でした。彼らにはおもねることなく、何ものにも囚われずに探求することで、私は彼らの注意力を引き留めました。本当に難問だつた一連の〈車輪〉授業のことを私は思い出します。しかし最も優秀な連中は、そこで何かを理解しましたし、軍人氣質を持ったやる気のあるこれらのクラスに必要なものは、それが全てです。その数年間は非常に疲れ果てて台無しでした。恐らくそのことが動機になって、私の主な授業で取り入れられた方法は、考えるとぞっとするようでも、実践するのは容易なものです。それでは、それを話すことにします。

小論文で失敗する生徒が質問するのは何時も、「如何に書かなければいけないのですか」です。その答えは決してありません。十分に才能があるのに、要求も大変に多い子供たちを相手にしていたので、私は或る日彼らに言いました。「小論文を最初の言葉から最後のピリオドまでを、あるが儘に全てを黒板に書くことにしましょう。それはパスカルと同じ位に美しくなりますよ」。この言葉は無謀でした。無謀の上にも無謀であらねばならないと私は確信しています。この勉強は実際に行われ、数週間で上手く行きました。こんなにも容易で、こんなにも効果があつたのを私はそれまで見たことがありませんでした。私にとつても同様に上手く行つたと言えます。

そうしている間に、「形而上学雑誌」によって一種の有名人になり始めていた私は、専門的思想家の仲間に入りました。哲学者や学者による昼食会があり、私は何時も参加しましたが、それは第一次世界大戦まで続きました。個人的なことは何も言いません。そして彼らに非難すべきことがあつたとは思わないで下さい。私は何時も上機嫌で、教師として振舞い、反論者たちを完膚無きまでやつつけました。彼らは何事も良く理解してくれましたし、それ以外にどうしようもありませんでした。もしも私が、「形而上学雑誌」を当時信頼出来る友人と一緒に主宰すること、つまりルヌヴィエールのやり方に倣つて殆ど全号に書くことを望んでも、誰も反対しなかつただらうと思います。しかし支配するのが重要である場合は、行動しなければならぬのであつて、書いて主張することではありません。私にはこの大いなる地位に就く時間は無く、誠実な友人にも別の見解があつたのでその意見を取り入れなければならず、華々しい臆見の輩が入つて来るにまかせなければなりませんでした。更に、悪いことが既に始まっていました。アンリ・ポワンカレは臆見の王でした。彼にとっては遊びでしかありませんでした。数学者や物理学者たちは、公式で私を悩ませました。それ以来、学者や哲学者たちを夢中にさせた〈相対性理論〉に、私は不安の影のようなものを見ました。ユークリッド空間とは別の空間があり、空間が歪んでいるとか真っ直ぐであるとか、時間が少なくとも四次元の空間であるということを私は信じませんでした。そうです、私はカントの立場を取つて正しく認識し始めて身を固めましたが、論敵たちには少なくとも気付かれませんでした。奪取出来ない私の感情のこの堅固さから、私は電撃的な砲火を何発も彼らに放ちました。しかしその豊富さは、狙撃兵にも未だ十分に通じていませんでした。私は彼らをもう少し先で割り振ろうと思います。臆見の輩とは縁を切りたいので、私は臆見の輩という言葉の説明のために、プラトンが全ての知識を二つの領域に分

割していることを思い起こそうと思います。高次の知識は学問ですが、低次の知識は臆見です（ギリシア語ではドクサ）。そして、この低次の領域にも低次と高次があります。低い方が偽の臆見で大衆のものであり、高い方が本物の臆見で教師のものです。これで全て言い尽くせるでしょう。しかしプラトンは、未だ何も始まっていないし、本当の知識は全く別種のものであることを十分に理解させてくれます。

別種の臆見もその時王国を分割していましたが、それはベルグソン哲学者たちでした。策に富んだ人物だったベルグソンのことは何も言わないことにします。しかしベルグソン哲学者たちは、彼らの月並みな思想で這いずり回り、同情を乞い、至る所に広まって流行していた学説が激しく攻撃されていることに、些か苦痛を感じて驚いているのは哀れでした。彼らが正しかったのは事実ですが、それは滑稽な機械論や、テーヌが一例を与えている知性による概念に、反対していることです。そして彼らはこの非存在を拒んだ時に、何かを言ったと思ひ込んでいました。結局彼らは、カトリック教と専制と戦争と一緒に袋の中に入れて、大変見事に目的を達成したと思っているのです。単純なのです。そこから私は、説明出来ない怒りに襲われました。というのも私は、これらの蒼白い論争家以上に妥協的な連中を見たことがなかったからです。人は良く見抜けるもので、私は何事にも何ら邪魔をしませんでした。四次元とか二十四次元という流行を気にも留めませんでした。生成とか捉え難いニュアンスにも気を留めませんでした。私はそこから悲劇を生みませんでした。癪に障ったのは戦争だけでした。そこからは、私が言う臆見が多すぎる程発見しましたが、私には思想以外に関心がありませんでした。そして戦争は終わりましたが、私は臆見とその変動幅の中にある王国には戻ることが出来ませんでした。

私は職務に復帰するのにやっと成功した後でも、低学年の生徒に囚人のようになって教えなければなりません。それは無視しようと誓ったあの哲学を、未来の陸軍士官学校生に課さなければならなかったのです。これは今まで経験したことのない栄光の無い戦いでした。そして結局私は、そこから出して貰い、少人数でも全く私にはお気に入りだった高等修辞学の授業を古巣のミシュレ校に引っ込んで行うことになって、嬉しく思いました。私は改めて、書くという穏やかな教授の方法を適用しました。それとは反対に、上級生たちと共に私は冒険にも身を投じました。初年度から私たちはスピノザの『エチカ』を、始めから終わりまでラテン語で読み、翻訳し、注解しました。二年目にはカントの『純粋理性批判』を同様に読みましたが、但しフランス語でした。この種の勉強は、少人数の教室以外では実施出来ませんし、びっくりする効果を齎します。その時はまるで危険な航海に出るようなものですが、それが私の仕事でした。この様な訓練は生徒たちと同様に私自身にも有益であった、と良く考えて置いて下さい。私は何度もスピノザに溺れましたが、それは真実で口が一杯になった時であり、余りに一杯になりました。これは美しい死でした。しかし、私には分かりませんが、人はどうにか自分で脱出します。これは他の世界と同じ様に危険な世界ですし、同じです。ここでは客観としての〈精神〉についての省察を、私が真実と思うことで完結します。思想家はこの巨大な存在に飲み込まれます。そして誰も思想家を哀れに思いません。もしも当然の結果とか注解の小さな浜辺にだんだんと座礁したとしても、幸いなことです。この時、思想家は意識を取り戻し、そして再び沈みます。この恐るべき航海は群を成して、好んで生徒たちと一緒に行くべきです。生徒たちは何も怖いものはありません。

しかし、その根底には何があるのでしょうか。それは行わなければならない一つの経験であり、存在の本質からの落下であり、あるいはデカルトから神への落下です。それは全体なる主を崇めるのを禁じ得ない、聖書の精神への最後の最も美しい努力です。しかし間違っ理解しないで下さい。その世界はここでは、重量と諸関係が信じ難い大きな動物になるのではありません。全てが精神であり、聖書と同じ精神そのものに従っているのです。そして、その世界の外見は溶けて、全く一つの〈知識〉の中に消滅しますが、私たちは下から近付けなくても、最も高い処から近付き易くなるのです。（それこそが恩寵になります。）この知恵は何度も私を夢中にさせました。そして明日もそこに身を置いたなら、夢中になるでしょう。しかしながら、私が全くそこにいないことは、スピノザについてのラニョーのノートを読めば十分に分かります。もしももっと正確に私が書いたものを良く見たなら、この弱さを人は見付けることでしょう。神はそれでもこの世界と同じであること、そして私はその時、ラニョーが「神は延長され、思考されたものであるが、両者の不可解な統一である」と言っているのを聞きましたが、理解する術を知らなかったということです。私は出来る限りのことを行いました。しかし、もしも私が知らないことまで言ったなら、弁解の余地はありません。

カントについては、私が言えることを全て言うには後回しにしなければなりません。そして今は何の魂胆もありません。実際に私が行ったように段階を追って行ったなら、通行可能な道を読者に提供出来るでしょう。そして私自身が身に付けたように、それを教える機会も提供出来るでしょう。私が書いたものは何時もその様な注意を払いませんでしたが、その理由はお分かり戴けることと思います。主要作品を読者が読んだ後の一九〇七年か一九〇八年頃の時点で、

私は既にその作品の中で哲学理論の基本概要を分かっていた。そして、今もそう考えています。というのも私はそこに、間違いや学説の不明瞭さも見ないからです。そこで出会う困難なことは、問題そのものの本性から来るものであるからです。そしてこの種の困難は、まさしく入門の始めから気付いていなければなりません。ですから私は先に進むことを止めて、有名なカントの『純粋理性批判』を（他の二批判も同じに）哲学用語の代表的課程であると言いたいのです。例えば、幾何学の証明のメカニズムを論理学と呼ぶのをカントは拒否しています。実際に本来の、所謂論理学は一方が言うことと、もう一方が言うことの矛盾を見分けて回避して、別のことを行うものでしかありません。何か新しい知識を私たちが発見することでは決してありません。しかし他方でカントは、私たちが垂線とか直線とか三次元から得ている知識を経験と呼ぶことも拒否しています。何故なら、ここで真の幾何学にとって重要なのは、あれかこれかを思考することではなくて、別な風に思考出来ないと理解することであるからです。同じやり方でカントが私たちに示しているのは、二つの異なる時間も同一の時間も思考出来ませんし、有限の大きさの空間も思考するのは出来ないことです。この種のことは、先験的分析論の名の元で、精神の目録又は認識形態の目録と名付けることが出来るものを構成しています。そして、例えば自我の統一が経験の一事実であると信じるようなことは、何時か正しく哲学するという全ての希望を奪うものです。それは一つの形式であるのに、私たちが一つの自我しか持っていないということ自体を判断していません。二つの自我を持っていると決して判断出来ない必然性によっているのです。「私には裏表がある」という命題を取ってみても、十分明白に表しています。恐らく諸原理の先験的演繹の始めには少し隠されているようですが、私はこの観念を強調します。実際に自我の統一は、まさしく諸原理の基本です。しかし概要の各章の表題は余りに重要視されています。端から端まで読むことで、この最初の間違いを訂正出来ることが良く分かります。私は最早求めませんでした。せめて全体重をかけさえしなければ、ドアは独りで開くのを知っているから、私は決して多くを求めませんでした。私たちが真理を求めるために持っている大きな愛は屢々真理を持ち損なう原因になる、とデカルトが言っていることを私は良く理解したように思います。その上、再び弟子になって遠くを見ないようにし始めても、少しも喜劇にはなりません。私は常にやり直さなければなりません。それ故に批評するどころではありません。批評するには常に早過ぎることを、私は経験から良く分かっています。その上、批評する者たちの手の中で、作家は溶けて仕舞うのです。批評から身を守る術を良く知っていたプラトンでさえ、溶けて仕舞います。勿論、あらゆる作家たちは多少なりとも身を守りますし、性急な読者を自然と犠牲にします。整地をするようなこれらの者たちや、荒廃させる者たちの一人は、カントのことを冒頭から言いました、「私は本体を除いてカントの全てを認める」。彼には用語集を思い起こして貰いたいと思います。〈本体〉とは純粋知性によって思考されることを言うのであり、感性から如何なる助けも借りません。この言葉は他に意味があり得ないのです。それに気付けば、その饒舌家も愚かではないのですから、空しくならず済んだでしょう。しかし私は、何か人の言うことを聞き入れる饒舌家を見たことがありませんでした。（完）

プロポは未だ全然現れていませんでした。それらが生まれたのは少なくとも一九〇六年です。つまり私がルアンを去ってから四年後です。それらのプロポを書いたルアン新聞は、私がパリに來た時は未だ企画段階にあっただけでした。ルアンから友人たちが助けを求めにやって來たのは、それから大して時間が経っていない頃でした。私は毎週、二段の記事を書くことで応えましたが、その表題は順次「日曜日のプロポ」から「月曜日のプロポ」になりました。これらの記事は探さないで下さい。つまらないものです。私も呆れる程でした。週一回の記事のことで私は一週間全てが台無しでした。二つか三つの考えを追い求め、適当な形にして書きましたが、全てが凡庸でした。どうしようもありませんでした。それでも何も無いより増しでした。

読者は良き審判者であることを、或る経験から私に理解させてくれました。既に長年に亘り（一八九一年以後）私は、二か月間の家庭教師をしていた時に知り合った親しい友人たちと、バカンスの時に再会していました。この時の幸せなバカンスを「二人の友の思い出」の表題で作品を書いて語りたと思いました。私の考えでは、これらの友人たちのうちで最も教養があつて思いやりのある思い出を、敬虔な人物へ捧げる筈でした。でも、その作品の目的は十分に達成されませんでした。その理由は、私が思うに彼からも仲間のもう一人の友人からも、殆ど学ばなかったからです。彼はテーヌの経験論以上に達したいと思っていませんでしたし、生き生きとした若々しい精神を輝かせていました。私は会話を弾ませるために、詭弁家を演じました。それは愉快で楽しいものでした。この貴重な友人は、司祭や教会の聖具係一族について勇氣を持って思考する自由を獲得していて、遠方から戻つて來たと言わなければなりません。私は彼と一緒にいて幸福でした。しかし彼の元を去ると、何もかもがやり残されていました。それ故に私は、決して彼を理解したいと思いませんでした。彼には、見知らぬ友人たちと同様に私が容易に生活出来ないことは著しくありました。彼は極めて明白に安っぽく思考することを決意した人であり、もし言うことが出来るとするなら、最も下らない観念連合の教説を探求方法として採用した人でした。ところで私は、この容易さが何時も人の心を十分に惹き付けることを知っています。その容易さが、私欲や情熱に合わせるのを私は見ました。イエズス会士もそれには決して不快感を持たないでしょうし、暴君も又同様であろうと私は見破っています。瞑想家の決定論を成長させて置きなさい。歳を取るのに任せて置きなさい。彼はいらいらした宿命論の中で変容するでしょう。そのことは幸福のための政治が全てにおいて、最も裏切る危険が大きいと言うに歸するのです。最後の息を引き取るまで、正義や善を自ら示していたこの友人の中に、有用性や連帯や社会至上主義や宣伝というあらゆる偽善が影のように現れるのを私は見ました。要するに昔の教会が火刑のための薪の山を持っていたように、連絡壕を持っているこの新しい教会を、私は少しも寛容になれません。そして恐らく私は、寛容というものを全く持たないのです。それは私が、如何なる真理も暗室の中のように私たちの中で描き出されることは決してなく、如何なる問題であっても構わずに、どんなに僅かな光でも把握するためには弱音を吐かずに、真理も偏見も集めることをしなければならないのを、良く理解することから來ているのです。議論と礼儀正しさは、精神を憔悴させます。それ故に、好意的に反論もなく開いて貰える確信が無いなら、決して油断してはなり

ません。それに当時の仲間であった老婦人は、豊かな精神を持ち、判断力も何時も持っていました。或る日私に、反論する時は精神の調子が狂うと言っていました。それ故に私は、次のマルクス・アウレリウスの言葉を座右の銘にしていました。「皆と一緒に押すこと、しかし皆と一緒に考えないこと」。但し、この誠実な友人は文体に関して良き審判者であることに変わりありませんでした。それではこの孤独な夢想家の余談から先程言った経験に戻ります。読者諸氏には、ついにルアン新聞のこれらのプロポの記事を朗読して読んで貰うことになりました。というのも私はずっと反対していたからです。私がずっと同じ様に望んでいたのは称賛してくれることを思っていたからです。この厳粛な朗読の結果は、完全に失敗したものになりました。私は考えていたことを言って、彼らを楽な気分させました。この種の経験を私は決して恥辱と呼びません。侮辱を感じたとするなら、拙いお世辞で慰められることだったでしょう。その次には、私ば態度を決めなければなりません。

暫く後になって、私はこの新聞に力を持っていて、私を大いに買っていたルアンの仲買人と話し合いました。私は毎日短い記事を書く決心をしたこと、それは失敗した記事でも直ぐに修正するのを可能にするだろうことを彼に言いました。彼もこの企画にたじろぎませんでした。私はこの仕事を前進させましたが、予想したとおり、前よりも少しも苦勞することがありませんでした。短い記事ですから意図が要らないのです。機敏に筆を進めて最後の言葉に至ることもありますが、至らないこともあります。焦点がずれていても、少しばかり拙いだけです。他方、何かを言うにしても、極めて多様な機会を求めざるを得ません。私は屢々、大幅に伝統的なジャーナリズムから外れることもありました。結局のところ私の練習帳の口調や文体が、毎日のプロポに表れていました。大胆で素早く書き直さないこの仕事から私が学んだことは、説明するのが容易ではありません。詳細に言う前に、この寄稿の仕組みを一言述べたいと思います。

私は、貧乏な新聞を援助するために、一度ならず又してもやって来たのですから、報酬が支払われないことは十分に承知していました。私は少なくとも全てに自由でなければなりません。それには異議が唱えられたこともありますが、私は決して譲歩しませんでした。暫く前に「形而上学雑誌」が、余りに短い論文であるからとのことで、馬鹿丁寧な断って来ました。彼らに是非があるかどうか、私は調べもしませんでした。だが、彼らのためには最早決して書きませんでした。報酬を支払うのは法外と思っている人々にとっては、何でもないことでした。その後、戦争末期に「ルーヴル新聞」が毎日寄稿するように頼んで来ました。こちらの報酬は良かったです。しかし最初の記事に偶然とは思えなかった削除部分があるのに気付きました。彼らも否定しませんでした。私は話し合う余地も無く、さっさと身を引きました。轡を拒否するこの蛮行を真似することを、私は人に勧めません。だが、今日でも同じことを行うことになる、と少なくとも私は書き留めて置きます。私の原稿を掲載する前に校正者が吟味することは、私には断じて許せませんでした。読者はこの激烈な自由を認識していなければなりません。何故なら、それは私の眼にとっては方法の一条項であり、文体の範囲にも入るからです。如何なる種類の検閲も受け入れられませんし、讃辞ですらも断ります。私から、取るに足りない批評家への懇願の手紙とか、少なくとも感謝のための手紙というものであっても存在しません。これは性格による特色と言うよりも、書く姿勢なのです。走る馬のように、私には自由な場所でなければなりません。

紙の空白部分は自由な場所です。しかし私は自分自身の規律を良く守る必要があるので、プロポの長さは便箋二枚分で満足することにしました。終わりを判断して、十四行詩を創る詩人のように、それに従いました。文章が発展して引き延ばさなければならなくなるのは極めて稀でした。屢々縮めなければなりませんでしたが、時間がありませんので削除箇所も見込んでいませんでした。これらの物理的条件は非常に重要であると思います。詩人たちを調べながら、私はそれらの物理的条件が何故重要であるのかを理解しました。しかし、それが如何にして散文も創り、飾りを創るまでになるのか、私には明白に解りません。自由で修正しない即興は恐らく一目見て把握し一飛びに行うように、一種の予想と前もって分割されている場所を要求しているのです。これらの用心深さが文体に反映して、一種詩法の決まりと同等のものを生みます。大変厳格な規則に従いながら私は、望み通りには屢々成功しませんでした。時には成功しました。正確に言って何に成功したのでしょうか。それは運動と雰囲気と高さを与えることでした。私が自分に課した条件は、読者のことを考える余裕を決して与えませんでした。頁数が足りなくなる心配も無く書き続けることは、自然に行うように次から次に考えをつけ加えて行くこともありませんでした。そして私は、カッコの中にカッコを開くのと同じような教育をするように勧められるばかりでした。でも、ここでは一つのプロポから他のプロポへ移って行くやり方は一つもありません。幾つかの異なる観念が現れるのに応じて、最終の柵が近付いて来ました。それらの観念の欲望は抑えられます。そして私はどうしてか知りませんが、その主要な観念が膨らんで来るのでした。隠喩が別の問題をつけ加える方法になる場合もあり得ます。確かに多くのものが齎される時、その言葉の中にはいわれが無くとも表現の付属となる事物の重みがあります。そこから一種の詩と力強さが生まれます。フーガを作曲する音楽家は、その様にして全てが一つの環になるまで集まって来る一瞬である終節の〈ストレット〉によって、時には掻き立てられます。全ては群を成しているかの如くやって来て、引き締めなければなりません。そして通過して、速くしなければなりません。その様なことは、私が判断する限りは私の曲芸師的芸当です。但し、このことで私は百回に一回も成功しませんでした。

私は更に、もう一つの条件を指摘しなければなりません。それは短い作品が出来ると直ぐに、どうかこうにか印刷され（ゲラ刷りは何時も新聞社で校正されました）翌々日には新聞になって読まれました。その時に欠陥があっても、万事休すです直せません。でも、それは非常に幸せなことです。何故なら、同じ主題についてもう一度やり直し、自らを訓練するからです。この様に音楽家も行うのです。二十回も百回もやり直します。それでも私は望まずとも勉強が出来る状態にありましたし、失敗作品を気にすることもありませんでした。この短時間だが全力を注いだ努力は、読者にも相応に良かったと私は十分に信じます。結論が見えている記事は走り読みしません。見えないと、それを読もうと勇気を持ちます。事実、その成功は大変に早くやって来ました。その意味は、読者二万五千人のうち十人か二十人がプロポを切り抜いて貼り付けていたのです。恐らく、毎朝仕事を始める前に、プロポを読んでいた人が千人位はいたということです。これらの初期の頃の読者には、何か信じられない誠実さを感じます。今でも生存する彼らは、これらの頁を間違いなく読むでしょうし、私が私の楽しみを生むように、彼らも若い頃を楽しむでしょう。信じなさい。少なくとも暴君のような観念を生みなさい。その火は消えていません。

やがて、私が前に話をした田舎の友人たちの前で、プロボを読ませる機会がありました。でも、今度は上手く行きました。私が最高の出来のプロボを選んだのは本当です。しかしながら、そこで私が見出して十分に生み出しもしたのは、最後まで全てを愛してくれる信者たちでした。最後が上手く終わっていない素描的文章の方が好きである、と言っていた熱狂的ファンにも出会いました。いずれにせよ遠くにも近くにも執拗にノン（否）と言う人がいて、絶対にこの種の文学は真に受けたくないのであり、全て受け入れたくないのです。私もそのことを理解することが出来るまでになります。何故なら私には完全に気に入った散文が幾つかあり、私が書けるものと全く似ていないからです。例えばヴァレリーの散文にはうっとりしますし、私の散文とは正反対です。

駆け足で幾つもの障害にぶつかったこの生き方は、大戦まで続きました。そして大戦と同時に終わったとさえ言えます。というのも日刊新聞のために毎日書くということは、最早以後の私にはなかったからです。私の修行期間は、この時に終わりになりました。私は、多少なりとも具体化して飾りを付けた幾つかの主題を、経験の中で自己の前へ押し進めました。先程は暴君のことを考えて言いました。そこにも一つの主題があります。一度ならず何回も憤慨して書きましたが、一種の身振りから書くことが一番多かったのです。私は暴君に見せかけて、暴君の考えを推測しました。ついに私は、君主制や暴君を大変上手に理解するまでになりました。幾つもの過激な行為とか醜悪さとか滑稽さに、びっくりしないようになりました。それらは罰せられない暴君はいないというプラトンの言葉を理解するにつれて次第に、大変自然に思えるようになりました。しかし、私はあの果敢な駆け足や後を見ないことで、罰せられない君主は誰もいないと考えるまでになりました。そこから政治が新しく見えました。何故なら、正義を持った友人たちは概して良き君主しか望んでいなかったからです。かくして共和国はだんだんと悪くなって行きます。そして私にとって良き君主は、悪い君主よりももっと恐ろしいものです。良き精神は、私の考えの中では行き過ぎて考えることが理解されます。反対に最も単純なことも同様に理解したいなら、その点を通して、抑制された点をもっと通過しなければならない意味において、真実も行き過ぎであることを私は十分に確信しています。

宗教はその頃、私には政治よりもずっと新しく見えました。ここでも私は司祭に話をさせて、彼の考えを見抜こうとしました。つまり当然、考えるようになるのを見抜くことです。私とこれらのことの対話をした人物を、私はフィレ阿斯神父と命名しました。そこで私はイエズス会士を反駁するのですが、そんなにも難しいことではありませんでした。私は政治に戻りました。しかし、政治が全ての教会であると主張することは、全ての聖人とか殆どの聖人を忘れることであり、修道院も忘れることなのです。私は子供だった頃に、父が良く動物の手当てをしに行っていた、大トラピスト修道院の内部を見たことがありました。ミュエ修道士や、威厳に満ちたブラン神父とも知り合いになりました。神を除いても、修道院全体が意味しているものを見抜くことには苦労しませんでした。断食、労働、固い寝床、朝の目覚めが、情熱や不眠にとっての良薬であったことを、私は生理的にも理解しました。宗教は人間にも大変良く似ていて、人間に合わせて作られているように私には見えました。何故なら、私たちの大事な仕事の一つには眠ることがあり、決して幽霊を見ないことであるからです。そして思慮深い人間は、この薬を魔法使いの意の儘に委ねるべきではないからです。当時の私はシャトーブリアンの『殉教者たち』を読みな

から、天国や天使やあらゆる仕掛けを笑っていました。しかし私は、〈教会〉が異教徒の世界で変わったものを探求するようになりました。先ず始めは、明らかに動物崇拝に結びついたサチュロスやパンのような低次の全ての神々です。その次には、何時も雲や泉や煙や鳥たちの飛翔からの解釈でしかなかった神託があります。同時に屢々、神託の診断でしがなく、あるいはイフィゲネアの死から思い起こされるような神託の結果であった人間の犠牲があります。ところが私は、情熱を鎮めるよりも掻き立てるのに相応しいこれらの野生の宗教に、惜しむべきものを何も見ませんでした。それどころか私は、情熱を精神よりも寧ろ肉体に住まわせている私の習慣により、時として恐ろしい秘密に近付いていました。というのも情熱は人間の中で、動物を目覚めさせると言うのでは不十分であるからです。情熱は、精神の水準に高められる時、自然の神秘、動物であることの栄光、ついには私たちの狂気そのものを神聖視する陶酔が内包していたことを更に理解しなければなりません。そして私は、〈悪魔〉のイメージがあらゆる誘惑を集めて来るには、上手く選ばれていることに気付きました。それらの誘惑は、人間が動物であるから陥り易いのではなくて、動物を裁くからでもあります。更にそこには、思考の閃きという一例があります。それは目標に何とか達するのではなくて、目標を追い越すようなものです。社会学者たちは、未開人たちのことで私たちの耳にがらがん響かせて言い始めていましたが（寧ろ繰り返して言っていました）、社会学者たちは未開人たちが時として自分自身をお互いに認識するのに近づくのを全く知らないらしいことに、私は気付きました。反対に私をびっくりさせた欺瞞によって社会学者たちは、未開人たちを全く不可解なものとして理解するのを当たり前としているようでした。ところが私がそのことを証明したいと思っていた事例の中で、まさしく全く反対のことを読み取りました。私は何でも皆と反対に考えました。何故なら今日でも未だ自然な偶像崇拝を、信仰者でも無信仰者でも解決していないからです。思考する動物という狂気には、大変に合理的な薬でしかないキリスト教にとっても、解決していないからです。パスカルは反対です。彼は、人間を越えるキリスト教がその様に奇跡とか秘儀というものに置かれることで、その様式を高めたのであると私は良く理解しました。そして神を信じない者たちは、触れるのが非常に容易なこの標的を用心して来ました。

何故、私はそこを通って行かなかったのでしょうか。それらの道が塞がれているのを私は見出したからであると思います。パスカルは、大変早く反駁されました。でも、大変早くパスカル主義者になることもあるでしょう。しかし、それは何も導きません。経験も説明しません。私は、盗人に対して発砲して良いかをド・サシー氏に尋ねるシトー会女子修道院の善良な人々や、ノン（否）と答えるド・サシー氏の方が好きです。この例によっても、人間は地上に独りでいて、動物や水や火に対して巧みであるように、激昂に対しても巧みなのです。この様にして先程言ったように、私は活発に走り回って道を探しました。そして茂みの抵抗を最小限にした道を見出しました。私の思想の同業者たちは、殆ど彼らの思想を信用していない、と私は結論付けました。恐らく、勿体振って偉そうにする方法としか見ていなかったのです。この考えそのものは言い過ぎです。しかし、博士たちの愚かさは全てが自分たちの能力を見詰めることから来ているのであり、間違えることに身震いするまでに恐れていると時々言われています。

キリスト教からオリンポスの信仰までの真の関係に気付くのに、私はかなりの時間がかかりま

した。その点についてヘーゲルはそれらの境界、あるいはもっと正確に言うならヘーゲルが発見したジュピターや古代の神々の対立から、私は多くを教わりました。その時私は、当然の結果としてジュピターが人間力の神でしかないが、集団的で規律正しいことを理解しました。しかしながら私はここで、指先にはっきりと感じている一つの理由によって独りであると気付きました。その理由は、軍隊や祖国という新しい名の下でオリンポスの信仰がキリスト教徒であろうとなかろうと、殆ど全ての人々の心の中で〈十字架〉による宗教に対して優位を占めていることです。キリスト教のこの二重の勝利は、二番目の勝利がその様に辛く殆ど確實ではないのですが、人間性の一機会として価値のあるものとして私は考察させられました。私は止揚させられませんでしたし、止揚出来るとも考えていませんでした。私は決してヘーゲル主義者になれなかったということです。そしてヘーゲル主義者たちも、決して十分に私を理解させることが出来ませんでした。何故ならこの力強い体系の推進力によって、彼らは資本主義と同じに、神託や奇跡と共に何時も上手く行くと信じているからです。私としては、所謂過ぎ去ったものが何時も同じ源泉から再生されて、決して変わらないのが人間であることを経験していました。

これらの全ての主張を吟味して下さい。あなたはそれらの主張が隠されたものでなく、理解するのに難しくもないことがお分かりになるでしょう。従って、それらの主張は全く自然に〈プロポ〉の中に入っていました。と言うよりも寧ろ、私の本来の些細な観念を叩きのめしてそこに侵入されたのです。というのも私が宗教的問題に取り組んだ時は常に、社会学者やその他の不信者たちの全ての間違いを私自身の中で再発見していた、と言う方が正しいからです。どうして私は、ルナンに続くことが出来たのでしょうか。いや、そうではなくて、私が当初から感じていたとおり、ルナンは一つの思想も持っていなかったと考えざるを得なかったのではないのでしょうか。思考することは容易いが、それを言うには取分け、せいぜい一段の半分の長さの記事で言うには、勇気がなければなりません。この方法は響感を買いましたが、私はそれも良く理解しました。しかし別のやり方で行うことは出来ませんでした。何冊かの厚い書物と言ってもそれ程厚くはなかったのですが、〈プロポ〉のシリーズが刊行されるまでになりました。しかしそれ以後、私が即興で楽しんで書くという評判に対しては何ら手の施しようがありませんでした。私は、この偏見に打ち勝つためには何も行いませんでした。私本来の土地を開墾する方に、大変急を要していたのです。それでは余りに世論を軽視していると言われるでしょう。そうです、既に一種の行き過ぎです。しかし、思考することは行き過ぎることです。私は力一杯飛躍する以外にそれまで何も発見しませんでした。私は、その理由を良く知っていますから、そのことを次に言おうと思います。ジャーナリズムの月並みな話題が、最も困難な哲学に如何にして私を投げ入れたのか、今はそれを説明したいだけですが、その哲学とは実際には皆のものなのです。

当時の〈プロポ〉にはその他に何があったのでしょうか。殆どが何時も同じで、情熱の感情を人間の肉体の活動によって全て分析するプロポでした。それはデカルト的であると言われていきます。その点についてデカルトから多く教わったのは確かです。しかし、結局のところ恐怖、怒り、絶望、憎しみの裏と同じものと愛情を説明するには、決して他の道はありません。私は、デカルトに戻って（何時も長い間拒否されたと思っていました）私たちの前を走っていて競争相手のいない思想に驚嘆しています。しかし、その欠点は人間の哲学には至る所にあります。大家たちが常に見本になることはありません。各人は人よりも先に立って、全て新しく考え出したい

のです。しかし、その新しいものは大変に哀れなものです。

兎に角、私は素っ裸の人間の見方になり、自分自身になって、富、商業、労働、賃金及びその他の同種のものの分析を一新するのを強く主張しました。そして、政治の地下にあるこの部分は、私が打ち下ろす鶴嘴に一番長く抵抗したものです。ここでの決まり文句は、銀行のように強力で、閉じられているということです。百万の自乗を殆どすっかり想像するのを如何に真面目に主張するのでしょうか。すっかり飾り立てて販売する百貨店に対して、屋台店を如何にして敢えて応援するのでしょうか。手仕事が真の労働であり、全ての富はそこにあり、一時間の労働は他の一時間にも値するということを言い、そして何度も言うのを聞かされるのはあなたには面白いのでしょうか。そこまで私について来る社会主義者とか共産主義者を私は見出すのでしょうか。そして機械が労働を非常に増大させても、消費よりも生産を同じ位に増大させないので、人間を駄目にして滅ぼすだろうと言うことを、どうして放置させて置けるのでしょうか。これらの主張は酷く苛立たせます。それらは私を驚嘆させもします。私はそこに戻ります。あらゆる側面からそれらを主張しようとしみます。私は常に正しいと確信していない、とさえ言うでしょう。しかし、あらゆることについては同じことを言うでしょう。私の証明ですか。それは私を満足させるもの以外は見出さない、ということです。全てを説明することですか。そんなことは出来ませんし、私は決して望んでいません。私の態度に時々感情を害する独断とは、実際には態度だけなのです。先ず強く心を打つことが必要です。疑いはその次にやって来ます。私が一度言ったように、あるいは多分書いたように、疑いは影のように確信に付いて来ます。

自然に関する命題は、遙かに確実でした。それは全ての私の思想の下地です。既に申し上げましたが、どの様にして最初に自己認識するのか、私には少しも理解出来ませんでした。主観的に思考する人々の状況を見破ることが出来た限り私には、夢想の中に閉じ込められて世界から隔離されて、殆どライブニッツのモナドのような窓の無い生活を展開しているように見えました。但しそうは言っても、その生活にも窓の影や一種の外的世界はあったのです。しかし、全ては内在していましたし、私たちが夢を見ている時のように孤独でした。これらの支持出来ない虚構による緻密な分析は、教育的で秘教的な教義のものです。決然と外界を思考し生きるために、余りに骨の折れるそれらの論拠を思い起こす必要はありません。これが大変に自然です。この点について私の読者たちの中で最も学識の無い人々が、実は最も良く私について来れる人々でした。私と同じ様に彼らは、もしも世界の堅固さが少なくとも疑いを挟むようになったなら、本を閉じることになったでしょう。そして私がものを書く時も、人間臭さというものを持つこの世界を綺麗に片付けて、私たちを抜きにしているように見ることを行つたつもりは決してありません。そしてその時に、乗り越えねばならなかった当初の錯覚は遠い地平線のものでしたが、それは実際に私の知覚にあるものと別のものではありません。そして私自身も、他人にとっては地平線にあるのです。でも、この簡単な考えは重大な結果を伴っています。何故なら、私たちは見知らぬものは別のものであり新しいものである、と先ず思うからです。私たちが遠くから憶測して考えれば考える程、そう思います。旅行してみると反対に、世界は何処でも同じであると分かります。しかしもっと適切に言うなら、世界と魂を分離した時から人はそのことを知っているのです。私たちがその世界にいると間違つて判断することを一時的に魂によって理解しますが、それは私たちし

かいません。その様に眼鏡を外して言うために、最も賢明な人々がその世界を見に来たのは遠い昔からです。しかしながら、彼らは多分慎重さから、そして恐らく宗教や道徳への恐れから、屢々鼻に眼鏡をかけたのです。私としては感嘆して何時も本を読みました。そして真剣に手に取った本の中には、何らかの神がこの世界を創ったのであり、それどころか私たちのために創ったのです。秩序や不変や極めて賢明な法則や、ついには天空の正義の輝きにより、そのことは良く見られることでした。私としては態度を決めていました。私がまさに天空の正義と名付けたかったことは、如何なる意図も意志も見られないこの世界の惰性そのものでした。この世界はいわば踊り回る原子を創るもので、大変上手に私たちを隠してくれる堅固な大地ですが、もしも私たちを飲み込むのと同じ法則で私たちが上手に操作するなら、私たちに示して救済してくれる大洋でもあります。慎重な人物がその世界の望むことと望まないことを、何処から大変良く知ることになるのかを尋ねるためには、この様に出された考えは受け入れられません。それに対して私は、人間の顔をその世界に貸し与えるこの幻想的な考えが何処から来るのか知っていることで反論するでしょう。議論は全てが、私たちの最も確実な考えを危険にします。従って私は、遊び半分では決して議論しません。そして教育の時も、決して議論しませんでした。最も簡単な叙述の時も、私たちに自由と幸福を直ちに生むこの世界の透明さが、時には何処から来るのかを少なくとも人は知らなければなりません。けれどもそれは希望の無い世界であり、祈ることも出来ない世界です。勿論、人が本気で祈る世界は魔法と呪術の糸を結んだり解いたりする酷く不安な王国でしょう。反対に人間を喜ばせるものは、重苦しい機械の中に身を置いている時でさえも、自分だけの間違いや不手際や子供じみた考えを、あらゆる原因として見出すことです。要するに私は、アリストテレスの言う目的因を長い間自分で綺麗に取り除いていました。私はプラトン同様に、殆どルソーも愛していましたけれども、無言でもあった彼の曙の祈りを理解しませんでした。そして感情豊かな女性が良く言っていたことも私は理解出来ませんでした。それは沈む夕陽を前にして、誰かに感謝の言葉を言いたくなるのを感じたというのです。その女性は嘗て、ジョルジュ・サンドの知り合いで、彼女に感嘆していました。私もジョルジュ・サンドには感嘆していましたが、あるが儘の事物には神にさようならをするだけです。どんな事物でもあるが儘にあるのがその存在の全てです。そのことは何ら尊敬に値しませんし、只注意に値するだけです。

これらの世界についての思想の中で、私が注目に値するように思われたのは、世界の美を何ら消していなかったことです。私は全く反対のように思われました。例えば大空の広大さは私の眼には何ら摂理を示していませんし、人間に与える何らかの憲章でもありませんでした。本質的には寧ろ、絶対的危険の如き不確実性を示していました。けれども私は、このもう一つの海辺で震えるまでにはなりません。そして、私は今でもそこにおります。私が時々説明したように、震えはこの種の危険からは決して生じません。ルクレティア(1)が大変良く言っていたように、恐怖を大きくするのは想像力です。生理学上の理由を言うのは止めます。というのも、もう一度他の処でそのことに戻って来るからです。人間は皆その様に思考し、彼らの遊びがそのことを証明している、と少なくとも私は理解しています。人間は裸の自然を求めます。人間は大洋とか氷河の上で、切迫した危険によっても自信をもって自らを支えます。最早、運が良い悪いの問題ではありません。事物は只、重さや傾斜に従うだけで、人間には何の考慮もしません。それらは孤独で美しいです。そこには神もいないことを、それらの孤独が証明しています。未開人が大地

の上で一步一步、木の精とか石の精の機嫌を損ねないかを恐れているのは知られています。けれどもその様な生活には、過ぎ行く時間の美しさを感じる事が出来ます。何故なら人間は四季に合わせて、羽虫のように太陽の光で踊るからです。しかし、その様な生活は世界の美を思考することが出来ません。何故なら思考には、呼吸をしている自由な動きが決して無いからです。誰かの機嫌を損ねないかと恐れる考えには、最も美しい曙を台無しにします。

美についてのこれらの考察は、大変に広く及ぶことが出来ますが、当時の私は殆ど考えが浮かびませんでした。その様な疑問は生じませんでした。私には非常に難しく見えました。一九一四年前のプロポに、『芸術論集』を準備するものは何も無いと見るのも私は信じません。物理学の明晰さによって、そして小さいものとか遠くのもの全てがここにあります。世界の全ての不思議は、認識するのが容易な原因との交差が齎され、一つ一つに如何なる不思議もなくなって何時も私が抱いた確信によって、私は巨大なこの存在に身を委ねて幸福でした。そして私はそこに感情の痕跡を何も残さないで、まさにそのことによって純粋な感情とその精神によって確認された一種の動物的愛情を手に入れました。最小の記述で空間を突然に掘り下げることが出来たり、世界とその潮を突然に思い起こすことが出来たりすることも、色彩のその純粋さのお陰です。それは私がルソーの中に見出した大変に激しい感情であり、取分けルソーが創造主のことを思考しない時のものです。けれども世界に関するこの偉大な思想は、最も困難な中で数えられる分析の研究によって支えられていなかったなら、時々怖くて震えることでしょう。というのも観念論による反論には罣が一杯あるからです。従って当時私が書いたものの中には、より長く継続して発展したがっていたような生活の哲学による痕跡は、少しも見出されないでしょう。しかし何でもないことです。恐れていないことを示して、人間の大地を全て安心させて歌うには一つの方法があります。その点に関しては既に一つの観念がやって来ましたが、それは信心深い世紀の時から、その後は自然の感情と呼んでいたものを認識出来なかったのです。この感情は寧ろ、良く自然に恐怖を抱いていたパスカルにはありません。

もしもルアン新聞の中での大戦までのプロポを集めたものを調べても、殆どが以上のとおりであると思います。これらの思想は、その他の処からも根源を持っていましたし、不断の勉強が糧になっていました。というのも私の仕事は何時も一層の研究を要求しましたし、取分け一九〇九年以後の時代は、リセの教授という職業が私の望みに沿って定着されたのです。さて今後は、この仕事に一つの思想を与えなければなりません。読者にとっても私にとっても、その見通しは厳しいものです。何故ならその時、私は最早仕事を修辭学的遊戯と捉えずに、思弁的思考の暗礁に乗り入れたからです。しかし、当時から忠実な読者たちがその他にも多く現れたのも本当です。但し本当の困難は、誰でも構いませんが、毎日の思考を形づくっているのです。さあ、元気を出して下さい。(完)

(1) ルクレティア(?~前五〇九)は、古代ローマの伝説上の貞女で、タルクイニウス王の息子セクストゥスに陵辱され、その復讐を親族に託して自害した。ローマ共和制樹立の発端と言われる。

## 訳者のことば

---

この翻訳は、Alain, *Histoire de mes Pensées* (1936) の全訳を企図としている。全三巻（三十四章）のうちの上巻（一～十章）である。二〇一七年五月までに全三巻を完訳する予定である。テキストとしては、Alain, *Les arts et les dieux* (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1958 に所収されているものを使用している。我が国における本書の翻訳は既に幾つかあるが、アランの思想を斟酌しながら新たに出来るだけ丁寧に翻訳することは、アランの思想を探究したい私にとっての長年の課題であった。

又、アラン（一八六八—一九五一）ことエミール＝オーギュスト・シャルティエ（本名）についての伝記を書くことを或る友人から勧められたのだが、アラン自身も言っているように私的なこと、家族や家庭のことをアラン自身が自ら書くのを嫌っていたため、局外者の私がアランの伝記を書くことはアランにとって不本意のように思われた。又、生憎とその力量もない。従って、アランの思想と精神にとっての伝記ともいえる本書を翻訳することで、その友人に応えたいと思う。

本書を翻訳するに当たり、森有正氏（一九五一）及び田島節夫氏（一九六〇）の優れた訳書を参考にしたが、多くの教示を授かったことに感謝申し上げます。

そして、この翻訳を通して、何時の時代でも決して古臭くない新鮮なアランの思想を理解し味わい、現代をより良く生きる機縁にして戴ければ、訳者としてこれ以上の喜びはないと思っている。

なお、翻訳した最新の章は、同じくブクログのパブーの電子書籍・同人誌『風狂』に毎月登録しているので、こちらの方もご愛読戴きたい。

二〇一五年十月三十日

たまプラーザの寓居にて 訳者記す

## わが思索のあと（上）

<http://p.booklog.jp/book/90878>

著者：アラン（翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/90878>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/90878>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ